

神奈川県立民俗学研究所 非文字資料研究センター
研究成果報告書

Report, Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

日本近世生活絵引

奄美・沖縄編

Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan
Focusing on Amami and Okinawa

神奈川県立民俗学研究所 非文字資料研究センター

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

絵引の研究は、比較的長い歴史を持っています。約 40 年ほど前の財団法人日本常民文化研究所の時代に、日本中世の絵巻物を素材にして『絵巻物による日本常民生活絵引』（全 5 巻）が発刊されました。この研究所が神奈川大学に移管された後、2003 年度に採択された 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の中で、絵引研究は継承され、発展してきました。2008 年度からはその後継組織として非文字資料研究センターが設立され、絵引の研究も本センターに引き継がれました。

今回の奄美・沖縄の絵引は、『日本近世・近代生活絵引』の編纂の範疇に入ります。この範疇には、すでに北海道編、北陸編、東海道編があります。COE プログラムの拠点リーダーであった福田アジオ先生のグループが沖縄に行き、『琉球寫真景』などの調査を行いました。それを受けて、今回の絵引編纂に取り組みました。本書の完成により、一応日本の北から南までの常民生活絵引を俯瞰することができるのではないかと思います。

『琉球交易港図屏風』（浦添市美術館蔵）は、近世における那覇港の繁栄ぶりを示す屏風絵です。多くの船が描かれています。まず、琉球から中国へ行く進貢船や接貢船が大きく描かれています。近世において、琉球と中国の間にこのような往来が盛んに行われていたことが示されています。それだけでなく、丸に十文字の薩摩の旗をなびかせている大型和船や天間船なども描かれ、その中には薩摩の武士の姿も見えるなど、薩摩との交流も描かれています。庶民の生活に関わる船として、漁師が乗るサバニや爬龍船競漕のハーリー舟、近海で物資を運んだ馬艦マーラン船なども描かれています。人物も多彩に描かれていて、琉球人の服装や髪形が分かるだけでなく、中国や薩摩の人が描かれ、国際色豊かな屏風絵となっています。

『八重山蔵元絵師画稿』は、絵師の習作ではありますが、石垣島の庶民生活を描いた点で大変興味深い画稿です。全部で 114 枚の絵がありますが、その中から 22 枚を選びました。当時の様子が生き生きと描かれていますが、とくに興味深いのは、大和（薩摩）商人や異国人が描かれていることです。ここでも、琉球の国際性が示されています。

『琉球寫真景』には、奄美大島の生活が描かれています。奄美大島は、1609 年の薩摩の琉球侵攻を契機に琉球王国から薩摩藩に移管されました。ですから、この絵に描かれた爬龍船競漕や豚飼などの風習は琉球に似ており、相撲は大和相撲を取っています。また、八月踊りなどは奄美の文化が描かれています。このように、文化の多様性を見ることができます。

この絵引編纂は、渡辺美季先生が中心となって進めてきました。渡辺先生が参加していなければ、完成はできなかったと思います。また、得能壽美・富澤達三の両先生からも、大きなご協力をいただきました。深く感謝します。その他、執筆、編集に携わっていただいた先生方、ご協力下さったすべての方々に心より感謝します。そして、貴重な資料の使用をご許可下さった浦添市美術館、石垣市立八重山博物館、名護博物館、そして滋賀大学経済学部附属史料館と京都大学総合博物館に心より感謝申し上げます。

本書を多くの方に利用いただき、ご意見などを頂ければありがたいと思います。

2014 年 3 月

非文字資料研究センター『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究代表
小熊 誠

日本近世生活絵引

奄美・沖縄編

目次

まえがき	i
凡例	iv

I 琉球交易港図屏風

1 全体図	2
2 落平・御物城	4
3 垣花・屋良座森城	6
4 帰国する進貢船	8
5 進貢船（帰唐船）	10
6 唐船	12
7 接貢船	14
8 ハーリー（船漕ぎ競漕）	16
9 三重城	18
10 迎恩亭	20
11 渡地	22
12 西の海	24
13 波の上・若狭	26
14 潟原	28
15 崇元寺	30
16 泊村	32
17 首里城	34
参考図版Ⅰ	36
参考図版Ⅱ	42
参考図版Ⅲ	48
参考地図	56

II 八重山蔵元絵師画稿

18 士族と平民1	60
19 士族と平民2	62
20 男と女1	64
21 男と女2	65
22 稲蒱り	66
23 稲束運搬	68
24 貢納と稲叢	70
25 俵の運搬と収納	72
26 遊びと生業	74
27 生業	76

28 機織り	78
29 公布調	80
30 出舟・入舟	82
31 仏壇	84
32 綱引き	86
33 道踊り	88
34 南風島	90
35 棒と獅子	91
36 大和商人	92
37 異国人1	94
38 異国人2	96
39 異国人3	97

III 琉球寫真景

40 (1) 名瀬の風景1（第1図・全体）	100
40 (2) 名瀬の風景2（第1図・部分）	102
41 (1) 爬竜船競漕1（第2図・全体）	104
41 (2) 爬竜船競漕2（第2図・部分）	106
42 芭蕉山（第3図・全体）	108
43 名音の集落（第4図・全体）	110
44 (1) キビ刈りと製糖1（第5図・全体）	112
44 (2) キビ刈りと製糖2（第5図・部分）	114
45 (1) 八月踊り1（第6図・全体）	116
45 (2) 八月踊り2（第6図・部分）	118
46 (1) 仕事帰りの人々1（第7図・全体）	120
46 (2) 仕事帰りの人々2（第7図・部分）	122
47 (1) 宇検の風景1（第8図・全体）	124
47 (2) 宇検の風景2（第8図・部分）	126
48 (1) 種付け豚と女たち1（第9図・全体）	128
48 (2) 種付け豚と女たち2（第9図・部分）	130
49 (1) 大和相撲1（第10図・全体）	132
49 (2) 大和相撲2（第10図・部分）	134
50 名瀬湾の立神（第11図・全体）	136
参考地図	138

解題と考察

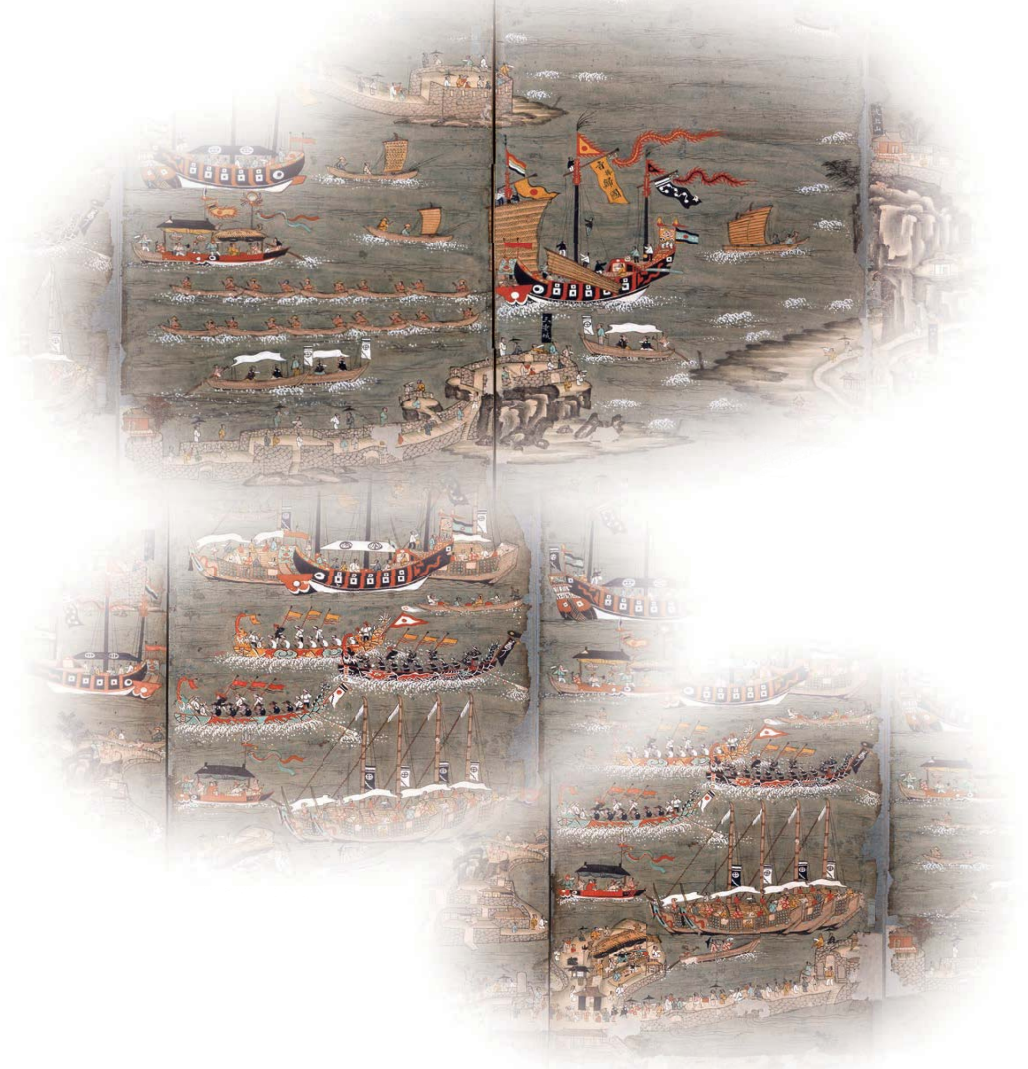
I 「琉球交易港図屏風」考（渡辺 美季）	143
II 「八重山蔵元絵師画稿」考（得能 壽美）	169
III 「琉球寫真景」考（川野 和昭）	183

参考文献目録	195
索引	199

- 1 本書は『日本近世生活絵引』の第4巻である。
- 2 本書はⅠ「琉球交易港図屏風」(浦添市美術館蔵)、Ⅱ「八重山蔵元絵師画稿」(石垣市立八重山博物館蔵)、Ⅲ「琉球寫真景」(名護博物館蔵)から、それぞれ17、22、11の場面を選択し、主題を示すタイトルを付け、描かれた事物・行為に番号を振り、それらを表現する「一般名詞」・「現地方言」を付した。また、場面全体の概要を読み取った解説文を付した。
- 3 各絵図の画像は、Ⅰは浦添市美術館所蔵のポジフィルム、Ⅱは『八重山蔵元絵師画稿集』(カラー複製版)[石垣市立八重山博物館1985]、Ⅲは東京大学史料編纂所所蔵のポジフィルムより作成した。
- 4 各画像は、原図より適宜切り取って作成した。各図は拡大・縮小されており、原図の大きさとは一致しない。
- 5 各画像内の事物・行為に付した番号は、基本的に左から右へ、もしくは上から下へと付けた。
- 6 行為を示す語彙には番号に□を付けた。「現地方言」は聞き取りや文献により、明確に判明したもののみ付した。
- 7 描かれた事物・行為に付けた語は、概ね以下の基準に従った。
 - (1) 原則として事物単体および個別行為に名称を付けた。
 - (2) 名称は現在の日本語を基本とし、必要に応じて現地方言をカタカナで併記した。
 - (3) 推測・想像による語彙の付与はできるだけ避け、内容判別の難しい事物・行為は解説文で説明した。
 - (4) ある程度判明しつつ、確定に至らなかった事物・行為には「?」を付けた。
 - (5) 一般名詞と区別しづらい固有名詞には、「」を付けた。
 - (6) 地名は〈地名〉と併記した。
 - (7) 画像内に書かれた文字にはアルファベットを付け、判読した。
- 8 本書の編纂は共同研究の方式で行われ、研究参加者全員で検討した。各場面の解説文は、執筆者名を文末に括弧書きで記載した。
- 9 「解題と考察」は、各執筆者が本書編纂(共同研究)の過程で得た知見に基づき執筆した。
- 10 巻末に、本書の編纂のため参考とした文献を、参考文献目録として収録した。また本書において参考文献を典拠として用いる際には[編著者+西暦]で表記した。
- 11 巻末には、絵引の事物・行為に付した語彙の五十音順索引を付した。

I

琉球交易港図屏風



1 全体図



琉球交易港図屏風

六曲一隻

紙本着色

縦 120.0 cm 横 290.0 cm

19 世紀

浦添市美術館蔵



2 落平・御物城



枠内を拡大表示

- 1 落平 ウティンダ
- 2 水売舟
- 3 水桶
- 4 立って舟を漕ぐ
- 5 漁師 ウミンチュ
- 6 投網する
- 7 魚籠
- 8 座って舟を漕ぐ
- 9 クバ笠
- 10 赤禪
- 11 御物城
- 12 白禪
- 13 扇を持つ
- 14 子供を抱く
- 15 奥武山〈地名〉
- 16 龍渡寺〈龍洞寺〉
- 17 松林
- 18 住吉の松林
- 19 傘をさす

- a 御物城
- b 龍渡寺

左上に給水に利用された落平^{ウティンダ}がある。現在の那覇市山下町にあった湧き水で、那覇港に出入りする船舶や港湾の住民にとって貴重な水であった。海に突き出た石樋の下に水売り舟をつけて、桶に水を溜めた。国場川下流（漫湖）から那覇港の出入り口に当たるこの辺りで、サバニに乗った漁師が漁をしている。2人1組で、鱸でサバニを繰る人と、舳先に立って網を打つ人がある。真ん中には獲物を入れる魚籠がある。クバ笠を被ったり、赤禪・白禪姿で網を打つ漁師もいる。その下の奥武山^{おものぐすく}は漫湖に浮かぶ数個の小島で、王国時代、那覇に入港する船内で疱瘡等の疫病が発生すると、患者はこの場所に隔離さ



部分

れた[小林 2005]。那覇港の入り口から突堤を経て、海に突き出るように石垣で作られた御物城^{おものぐすく}が見える。創設年は不明だが、1471年刊の朝鮮の地誌『海東諸国記』[申 1991]に「宝庫」として記載されている。当時盛んだった海外貿易の貿易品収蔵庫で、酒蔵としても使われたといわれている。海外貿易が衰えた近世には荒廃し、1731年の記録によれば「倉屋すでに廃れ、遺址なお存す」という状態であった([琉球国旧日記][首里王府 2005])。この絵でも、子供を抱く女性が描かれ、すでに公の場所ではなくなっていたことがうかがえる。現在では、那覇港の米軍施設となっている。(小熊誠)

3 垣花・屋良座森城



- | | |
|------------------|---------|
| 1 坂道 蚊坂 (ガジャンビラ) | 9 屋良座森城 |
| 2 垣花 (地名) | 10 狭間 |
| 3 橋 スラ場への道 | |
| 4 住吉宮 | a 住吉 |
| 5 松林 住吉の松林 | |
| 6 祠 ミーヌシン | |
| 7 崎原 (地名) | |
| 8 イビの前 | |

図の左側は垣花のあたり。明治初年の「那覇読史地図」〔球陽研究会 1974〕所収)には、スラ場から上る道の南側が湖城村、北側が儀間村で、垣花はこれらの汎称という〔『南島風土記』〔東恩納 1950〕〕。垣花は、遊里渡地に近く、小禄・豊見城とともに琉球絨の主産地として知られ、住民はほとんど農業を営まず、漁労・船頭などを生業にする者が多かったという〔『南島風土記』など〕。各家は草葺きで、たたずまいは農村的である。「落平」(図 1) から、垣花に至る海岸沿いの道は、「那覇読史地図」には見えない。図の中央は、儀間村の北部、住吉の地。住吉宮は、1709 年に作成された『那覇由来記』〔那覇市企画部市史編集室 2004〕所収)に引用される、1659 年再興の棟文に住吉大明神とあり、はるかに首里城を望む絶景の地という。社前を

右に、300 メートルほどの浮道を行くと屋良座森城がある。那覇港南側の砲台で、北の三重城とともに海上防備にあたった。1553 年完成〔『中山世鑑』〔首里王府 2011〕〕。図では砲台などは見えないが、攻撃用の狭間がある。狭間は日本の場合、縦長の四角いものは弓矢用といわれる。古琉球期には三重城とともに倭寇を撤退させ、1609 年の島津氏の琉球侵攻の際にはその侵入を阻止したといわれる。ミーヌシンは「目之心」とあり、岩穴が前後 2 つあって、前には正観音像を安置し、賓頭廬も祀る。拝殿は「運貨漕之諸船頭」が建立したという。後の岩穴にも賓頭廬が祀られるが、信仰する者はいなかった〔『琉球国由来記』〔外間・波照間 1997〕〕。その先の崎原是那覇港の入口である。(得能壽美)



枠内を拡大表示

4 帰国する進貢船



- 1 中型船 馬艦船
- 2 中型船 大和船
- 3 中型船 馬艦船
- 4 無人島 大いふ (ナガンヌ)
- 5 無人島 小いふ (クエフ)
- 6 無人島 神山
- 7 慶伊瀬島 慶伊干瀬 (チービシ)
- 8 五色旗
- 9 三角旗
- 10 三角旗
- 11 むかで旗 モカズ旗
- 12 七つ星旗
- 13 日の丸旗
- 14 船旗
- 15 帆 (頭巾頂?)
- 16 本帆
- 17 舳先旗
- 18 舳先の装飾
- 19 砲煙
- 20 大型船 帰唐船
- 21 中型船 馬艦船
- 22 中型船 馬艦船



枠内を拡大表示

中国から帰国する進貢船を帰唐船と呼ぶ。琉球船の出入港地であった福建省の福州と那覇を往来する進貢船には、海賊対策のために薩摩藩から借用した鉄砲と大砲（石火矢）が積み込まれていた。大砲は本来、海賊への応戦・撃退を目的とするものであったが、海上で邪気を払う際や出入港の際に空砲を放つことが慣例となっていた。後者の空砲は、港内への曳き舟（曳航船）を要請する合図であった。

那覇から約 15 キロメートルの沖合に 3 つのサンゴ礁の小島がある。その総称をチービシと呼び、慶島、慶伊瀬島とも表記される。チー・ビシは慶（慶伊）・

干瀬に当たる。三島では大いふ（ナガンヌ）島が長さ約 1 キロメートル弱で最大、それに次ぐのが神山島、最小は小いふ（クエフ）島である。いずれも平坦でほぼ砂州からなっているため居住は困難で、現在においても無人島のままである。ただし、チービシ付近は古くから魚介類や海苔が豊富な漁場であった。そのため 1676 年に神山親雲上なる人物が首里王府へ銭 100 貫文を上納して、チービシの用益権を得ていた。その後（年代不明）、同額の上納銭で用益権は渡嘉敷島とかしきの前慶良間村に移った。（豊見山和行）

5 進貢船（帰唐船）



福州から帰国する進貢船（帰唐船）の那覇入港を中心とした場面が描かれている。船に掲げられた「捧旨帰国」「奉旨帰国」旗は、中国皇帝の許可（旨）を得て帰国することを表している。帰唐船が港内へ入港するために多数の小舟によって曳航されている様子や薩摩役人の乗る伝間船が帰唐船へ向かう場面も見られる。帰唐船の入港時には、抜け荷（密輸）防止のため、小舟など民間船の航行は厳禁とされていた。帰唐船の貿易品監視のため薩摩役人らの乗る小舟だけがいち早く帰唐船へ乗りつける規定であっ

た。本図とほぼ同じ構図で描かれた「琉球貿易図屏風」（参考図版Ⅰ）では、薩摩役人の伝間船の船旗（丸に十文字）の下方に「唐物方」とある。唐物方は琉球に設置された薩摩藩の対中国貿易の部署で、1844年に「産物方」と改称された。なお、本図では帰唐船の周辺に小舟や屋形船、さらに船漕ぎ競漕の場面も描かれているが、異なる時期の場面が同時に描かれたものと思われる〔豊見山 2004a・b〕。（豊見山和行）



- | | |
|--------------|---------------|
| 1 小舟 サバニ | 11 小舟 伝間船 |
| 2 大型船を曳航する | 12 船 |
| 3 大型船 進貢船 | 13 船を漕ぐ |
| 4 弥帆（前帆） | 14 薩摩役人 唐物方役人 |
| 5 舳先旗 | 15 扇子 |
| 6 三角旗の竿 唐竹竿 | 16 船旗（丸に十文字） |
| 7 帰国旗「捧旨帰国」旗 | 17 木 桡 |
| 8 本帆 | 18 見物人 |
| 9 太鼓を叩く | 19 屋形船 流れ船 |
| 10 太鼓 | 20 赤覆面 |



- | |
|--------------|
| 21 三線 サンシン |
| 22 三線を弾く |
| 23 酒を注ぐ |
| 24 杯を差し出す |
| 25 漕標 みう木 |
| 26 帆 網代帆 |
| 27 釣竿 |
| 28 面を被る |
| 29 笊（食べ物入り） |
| 30 旗頭（刀型） |
| 31 湧田の旗頭 |
| 32 三重城 ミーグシク |
| 33 ズボン |

- a 旨捧帰国
b 三重城

6 唐船



- 1 御紋旗 左巴御紋 (ヒジャイグムン)
- 2 船旗
- 3 櫓の装飾 (鳳凰の図)
- 4 櫓の装飾 (人物の図)
- 5 舵
- ⑥ 銅鑼を打つ
- 7 銅鑼
- 8 櫓檣
- 9 七つ星旗
- 10 むかで旗 モカズ旗
- 11 三角旗
- 12 三角旗
- 13 本檣
- 14 五色旗
- 15 日の丸旗
- 16 弥帆檣
- 17 天幕 幕屋
- 18 舳先旗
- ⑨ 子供を抱く
- 20 大型船 唐船 (トーシン)



枠内を拡大表示

琉球国の公船（官船）は中国のジャンク系統に属し、当時においては船身約45メートルの大型船も建造されていた。中国（明）との朝貢関係成立（1372年）以後、琉球は明から大型船を約1世紀以上にわたって無償で支給されていた。その後、自前でジャンク系統の大型船を建造するようになり、近世の琉球公船はそれに由来する。近世期に那覇と中国福州間を往来した船舶は、渡航形態によって渡唐船（進

貢船）、接貢船、（遭難民）護送船と呼ばれた。同じ船が那覇と鹿児島間を往来する際には、海賊対策の大砲を取り外し、船名は楷船と呼ばれた。18世紀初頭から渡唐船と同型ではあるが、民間商船として馬艦船が登場するようになる。本図の船は「御紋旗」が掲げられていることから官船であることが分かる。（豊見山和行）

7 接貢船



中央の「接貢」旗を掲げるジャンクタイプの船舶は、接貢船と呼称された。明末から清代には、琉球から中国福州へ進貢船2艘を隔年で派遣する2年1貢体制が確立していたが、貿易回数を増やすため琉球は1660年代頃から進貢の空白年に接貢船1艘の派遣を割り込ませ、毎年貿易することを可能とした。その接貢船と周辺の大和船に琉球人や薩摩人(船頭・水夫)が入り交じってハーリー(船漕ぎ競漕)を見物する場面が描かれている。大和船に乗船した赤い着物の女性は遊女と目される。尾類と呼ばれた遊女らは、那覇港に近接した辻、仲島、渡地に接待所兼

遊郭があった。彼女らは単身赴任してきた薩摩の在番奉行や船頭らの身の回りの世話や商売にも携わった。接貢船の背後の出島は地名では君南風と呼称され、唐船作事場(すら場)も立地していた。そこには久米島の神職・君南風を遙拝する拝所があった。毎年、進貢・接貢船の出航前には首里王府から久米島の君南風へ航海安全祈願の供物が送付された。この場面は唐船作事場に航海安全祈願の宗教施設が設置されていたことが分かるものとして貴重である。(豊見山和行)



- 1 大型船 大和船
- 2 さがり
- 3 弥帆柱
- 4 赤襷
- 5 苦緒
- 6 帆摺管
- 7 遊女 ジュリ
- 8 表垣立
- 9 船旗(丸に十文字)
- 10 帆摺れ
- 11 大型船 接貢船
- 12 舳先の装飾(獅子の図)
- 13 弥帆櫓
- 14 日の丸旗
- 15 五色旗
- 16 天幕 幕屋
- 17 本櫓
- 18 接貢旗
- 19 三角旗
- 20 むかで旗 モカズ旗
- 21 三角旗
- 22 七つ星旗
- 23 船旗
- 24 銅鑼を打つ
- 25 銅鑼
- 26 撥
- 27 小舟 サバニ
- 28 クバ笠
- 29 櫓
- 30 櫓を漕ぐ
- 31 傘
- 32 子供を抱く
- 33 子供を背負う
- 34 天幕 幕屋
- 35 造船所(唐船作事場) すら場、すら所
- 36 君南風(地名) チンペー
- 37 君南風遙拝所
- 38 旗止め具?

a 接貢



枠内を拡大表示

8 ハーリー (船漕ぎ競漕)



- 1 小舟 ハーリーブネ (久米村)
- 2 日の丸旗
- 3 鉦 ハーリーガネ

- 4 鉦を打つ
- 5 旗を持つ
- 6 櫂を漕ぐ

- 7 被り物 赤冠
- 8 白鉢巻
- 9 三角旗

3艘のハーリー舟 (爬龍舟) による船漕ぎ競漕を中心として描かれている。那覇港内でのハーリーは、泊村・久米村・那覇の3艘で競われた。ハーリーは本来、雨乞い祈願の祭礼 (ウガンバーリー) を主として毎年、旧暦5月4日 (ユッカヌヒー) に行われていたが、しだいにその本旨は薄れ、1740年代頃には若者達の勝負事のようにになっていた。その

ため、時にはケンカに発展することもあった。泊村舟は黒色の船体で漕ぎ手は後鉢巻、久米村舟は黄色の船体で漕ぎ手は向鉢巻、那覇舟は緑色で漕ぎ手は陣笠を被る、というように揃いの出で立ちであったことが絵図から分かる。見物人は首里・那覇の者たちだけでなく、那覇周辺の田舎からも老若男女が大勢くり出し、幕屋 (テント) や棧敷などを設営して



- 10 赤鉢巻
- 11 舵
- 12 船旗 「とまり」 旗

- 13 船先飾り
- 14 船尾飾り
- 15 小舟 ハーリーブネ (泊村)

- 16 小舟 ハーリーブネ (那覇)
- 17 陣笠
- a とまり

見物した。陸上からだけでなく、若者や遊女たちも多数の小舟に乗り込み、思い思いに鉦や鼓を打ち鳴らして声援を送ったり、歌三線などの余興も見られたとされる。飛沫をあげて力漕するハーリー舟と周辺の小舟や陸地から声援を送る見物人で喧騒を極めていた様子が伝わってくる場面である。(豊見山和行)



枠内を拡大表示

9 三重城



枠内を拡大表示



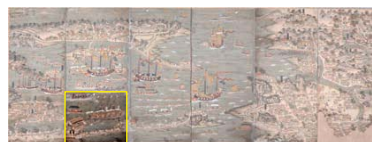
- 1 小舟 サバニ
- 2 船を漕ぐ
- 3 船
- 4 薩摩役人 唐物方役人
- 5 小舟 伝間船
- 6 船旗 (丸に十文字)
- 7 日本刀
- 8 紋付羽織
- 9 丁髷
- 10 天幕 幕屋
- 11 白禪
- 12 中の橋 (臨海橋)
- 13 中三重城
- 14 継橋 ツギハシ
- 15 三重城 ミーグシク
- 16 桶 ターグ
- 17 箱
- 18 漂標 みう木
- 19 銃眼 おきぐら
- 20 沖宮

a 三重城

ミーグシク
三重城は那覇港北岸に設けられた城塞で、通堂崎から、小橋、大橋、臨海寺、中の橋、継橋を経て至る。「新城」の意義があり、1554年に築城された対岸の屋良座森城(図3)よりやや遅れて築かれたためにこの名があると考えられる。屋良座森城とともに、倭寇に備えて築かれた海防監視の砲台で、冊封

使録にいう北砲台である。1609年の島津氏の琉球侵攻以降は軍事的な存在理由を失い、1683年には無人で石垣を残すのみであったという。石垣の一部は拝所として現存しており、昔の面影を残している。薩摩役人(唐物方役人)に関しては、図5の解説を参照のこと。(真栄平房昭)

10 迎恩亭



枠内を拡大表示



部分①

- 1 帆柱
- 2 帆摺れ
- 3 弥帆柱
- 4 船旗（丸に十文字）
- 5 天幕 幕屋
- 6 遊女 ジュリ
- 7 吹き流し？
- 8 さがり
- 9 薩摩の御用船（弁才船）
- 10 団扇
- 11 小舟
- 12 艫を漕ぐ
- 13 艫
- 14 赤禪
- 15 臨海寺 沖の寺
- 16 僧侶 ボージ
- 17 碑
- 18 大橋
- 19 荷を運ぶ
- 20 箱
- 21 小橋
- 22 屋形船 流れ船
- 23 旗頭（矛型）
- 24 吹き流し
- 25 幕
- 26 赤鉢巻
- 27 三線 サンシン
- 28 鶏の面
- 29 赤覆面
- 30 歌舞
- 31 箱（食事と酒？）



部分②

- 32 迎恩亭（通堂屋）
- 33 迎恩亭の門
- 34 水桶？
- 35 薩摩役人
- 36 紋付袴
- 37 丁髷
- 38 酒と煙草？
- 39 荷
- 40 駕籠
- 41 籠
- 42 日本刀

1609年の琉球侵攻後、薩摩藩は琉球間のヒト・モノの動きを統制下に置いたため、琉球へ渡航できる日本人は①藩から琉球監督のために派遣され那覇に駐在する在番奉行衆20名ほどと、②藩の委託を受けて琉球の年貢米・砂糖などを運送し、代わりに琉球で商売を行う薩摩船の乗組員（船頭・水主など）にほぼ限られるようになった（本書第2章・図36の解説も参照のこと）。この絵の中央には、日本の弁才船タイプの船が並んで停泊しているが、前述の状況と船尾の旗印から薩摩藩の御用船（兼、商船）と考えられる。船上には薩摩人と談笑する遊女が描かれ、船の側には薩摩船に向かうとみられる遊女の乗る小舟も描かれている。

画面左下（部分②）には、中国皇帝の使者である

冊封使が渡来した際の上陸地である通堂崎がある。迎恩亭（通堂屋）と呼ばれる休息所で、在番奉行衆と見られる薩摩役人の一行が、琉球側のもてなしを受け、ハーリー競漕を見物している。その上に描かれた赤い小舟は貸し切りタイプの遊覧船であろう。東恩納寛惇『童景集』〔東恩納1978〕には、3月3日の節句について、「遊興の主眼は流れ船と唱へ遊船で、屋形船を一艘雇切り、幕を張り、御馳走を散々持ちこみ、ここでも亦鼓を乱打してはやし立て唄ひぬく」と説明されている。同様の船であろうか。本図では鶏の面や赤い布による覆面姿で、三線に合わせて扇子を振り、楽しむ様子がうかがえる。（真栄平房昭・本村育恵）

11 渡地



- 1 硫黄城 ユーワグスク
- 2 渡地〈地名〉 ワタンジ
- 3 宮古蔵 ミャークグラ
- 4 船手蔵 (船手座)
- 5 遊女 ジュリ
- 6 渡地遊郭
- 7 小舟
- 8 思案橋
- 9 唐船小堀 トーシングムイ
- 10 通堂〈地名〉 トウンドオー
- 11 新湊那覇江碑
- 12 薩摩役人
- 13 荷を担ぐ
- 14 白禪
- 15 箱 (食事?)

- a 硫磺城
b 渡地
c 船手

那覇港北岸付近 (東町から渡地) が描かれている。渡地の地名は、対岸の垣花へ「渡し」があったことによるとされる。思案橋によって東町と結ばれ、中国への進貢品である硫黄を貯蔵する硫黄城、宮古・八重山からの貢租を収納・管理する宮古蔵、公船の製造・修繕や船材の格納出納をつかさどる船手蔵、渡地遊郭などが置かれ、手前には琉球の公船や冠船 (冊封使の船) の修理を行う唐船小堀があった。思

案橋は、遊郭への通り道にあったためにこの名がつけられたという。この図でも遊郭とみられる建物のそばに遊女が描かれている。画面左下は通堂の石灯籠、右下は1717年に行われた那覇江浚工の竣工を受けて建立された碑と見られる。現在、碑の残欠が沖縄県立博物館に所蔵されている。(真栄平房昭)



枠内を拡大表示

12 西の海



那覇の辻村の西の海一帯の部分。絵の中央部分の屋形船に、肝入に誘導されて2人の遊女（赤い衣裳は遊女を表す）が乗り込もうとしている（部分①）。その船での遊興のための酒肴を天秤棒で運んできた下男がいる（部分②）。屋形船では遊女の品定めか、幕の下から顔を覗かせている男共がいる（部分③）。海岸沿いに勢いよく炎を上げている灰焼き窯が見え

ている。灰焼き窯とは、貝や珊瑚片などを焼いて船舶用の塗料の石灰を製造する窯のことで、こうした灰焼きは1731年以降、中国人漂流民から技術を学んで各地に設けられたとされている。海岸の岩場の突き出た部分に杭らしき物が立てられているが、これは浅瀬の存在を示した落標^{みおつくし}と推測される。那覇港のあちこちに見られる。（田名真之）



部分①



部分③



部分②

- 1 屋形船
- 2 日の丸旗
- 3 旗頭
- 4 船頭 シンドウ
- 5 櫓
- ⑥ 幕の下から顔を覗かせる
- 7 遊女 ジュリ
- 8 肝入
- 9 下男
- 10 赤禪
- 11 桶 ターグ
- 12 箱
- 13 灰焼き フェータチ
- 14 潮の崎〈地名〉 スーヌサチ
- 15 長浜〈地名〉
- 16 滞標 みう木

a バクチャ（博奕屋） バクチャヤー



枠内を拡大表示

13 波の上・若狭



枠内を拡大表示

波の上から若狭海岸にかけての部分。波上宮や護国寺、天尊廟などがある。この一帯の海岸線は波の上、上の毛、雪崎と丘陵が連続し、各々の先端が崖となって海に突き出していた。波の上は景勝地として、冊封使録中の「中山八景」に「筍崖夕照」としてあげられている（徐葆光『中山伝信録』〔徐1999〕、周煌『琉球国志略』〔周2003〕など）。波上宮は琉球最高の社格を誇る神社で、創建年は不明だが、16世紀以前に成立していたとされている。



部分

- | | |
|-------------------|-------------|
| 1 天尊廟 | 16 辻村〈地名〉 |
| 2 屋根付き門 ヤージョー | 17 鳥居 |
| 3 天尊小堀 テンソングムイ | 18 若狭町村〈地名〉 |
| 4 仁王像 ニオーブトゥキ | |
| 5 梵鐘 | a 波上山 |
| 6 僧侶 ボージ | b 護国寺 |
| 7 護国寺 ナンミンヌティラ | |
| 8 遊女 ジュリ | |
| 9 ブーサーをする | |
| 10 酒器 チューカー | |
| 11 唐守嶽 トウマムイ | |
| 12 波上宮 ナンミン | |
| 13 上の毛〈地名〉 ウィーヌモウ | |
| 14 雪崎〈地名〉 ユーチヌサチ | |
| 15 あかつら〈地名〉 アカチラ | |

護国寺は琉球の真言宗の本山で、15世紀には創建されていたと推測されている。1609年の島津侵攻後、摂政・三司官の任官に際しては、島津藩主に対し起請文の提出が義務づけられていたが、起請文への署名は薩摩の在番奉行の立ち会いの下、護国寺で行われた。しかし、幕末期には、1848～53年の間、英国宣教師のベッテルハイムが家族とともに居住したため、署名は那覇東町的那覇里主所で行われた。天尊廟は道教の寺院で久米村の管轄となっていた。

15世紀には創建されていたとされるが年代は不明。また唐守嶽は唐旅（中国への進貢等での渡航）の際の安全祈願の拝所として知られた。唐守嶽前の広場らしきところで、遊女を呼んでの宴で、男共が興じているのはブーサー（琉球のじゃんけん）である（部分図）。負けたら酒を一杯飲むのがルールである。（田名真之）

14 潟原



枠内を拡大表示

- | | |
|----------------------|----------------|
| 1 馬場 ウマイー | 32 美栄橋 ミーバシ |
| 2 競走馬 ウマスーブ／ウマズリー | 33 七星山 ナナチバーカー |
| 3 手綱 | |
| 4 下鞍 | |
| 5 しりがい | |
| 6 馬の耳（たてがみ？） | |
| 7 向鉢巻 | |
| 8 後鉢巻 | |
| 9 速足 アシクマスン | |
| 10 子供を抱く | |
| 11 傘をさす | |
| 12 扇を持つ | |
| 13 沼井台 デーグァー | |
| 14 苫 カマス／カマジー | |
| 15 さら | |
| 16 桶 ターグ | |
| 17 クバ笠 | |
| 18 万鋤（浜曳） クルバシ | |
| 19 よせ ユシ | |
| 20 はらいたけ ハボウキ | |
| 21 塩田に撒いた砂を均す | |
| 22 塩分が付着した砂を集める（集砂） | |
| 23 砂に筋目を入れて乾燥を促す（爬砂） | |
| 24 茅葺き カヤブチャー | |
| 25 瓦葺き カーラー | |
| 26 王府役人主従 | |
| 27 駕籠かき | |
| 28 傘持ち | |
| 29 槍持ち | |
| 30 挟み箱持ち | |
| 31 泉崎橋 イジュンザチバシ | |

那覇の東海岸、潟原を描いた部分。北は川向この泊村、東は上が久茂地村、下が泉崎村である。潟原は干潮時には広い干潟が出現する。そこで古くから製塩が行われ、また馬勝負（琉球式の競馬）が行われた。馬勝負は何頭もの馬が右に左に歩を進めている。見物人も様々で老人から女、子どもまで楽しんだ、那覇地区の一大イベントであったことが分かる。なお、干潟を利用した製塩法は薩摩から導入され、1694年に潟原で始まったとされる。首里、那覇の大消費地を控えた生産地として、元禄期には年間400石を産したという。画中では、製塩作業の各工程が描かれている。潟原の傍らの石積みには、

塩田に撒くための砂が積載され、雨による流出を防ぐために苦で覆われている。

さて、画中右側に上から下へ3つの橋が描かれている。上が崇元寺の前に架けられた三連のアーチ橋の安里橋（現在は崇元寺橋）、それに続くのが美栄橋、そして駕籠に乗った王府の高官の一行が渡っている泉崎橋となる。何れの橋も創建年は不明だが、安里橋と美栄橋は15世紀中葉の長虹堤建造の際に架けられた3橋の内ともされている。泉崎橋ともども18世紀初頭に新造されている。なお、泉崎橋近辺は「中山八景」に「泉崎夜月」として橋に懸かる月の景色があげられている。（田名真之・儀間淳一）

15 崇元寺



- 1 茶湯崎 丘 チナザチバシ
 - 2 大道松原
 - 3 大道毛之碑文 ウフドーモのひもん
 - 4 傘をさす
 - 5 馬で駆ける
 - 6 八幡 丘
 - 7 崇元寺 スーギージ
 - 8 崇元寺の石門
 - 9 崇元寺前の下馬碑
 - 10 安里橋 (崇元寺橋)
 - 11 外に座って涼む
 - 12 クバ扇
 - 13 象棋 (中国将棋) チュンジー
- a 大道
b 崇元寺



部分



枠内を拡大表示

右上から大道の坂を下り、崇元寺に至る。坂道には横線が引かれ、奥行き長い琉球式の階段になっていたと思われる。坂道の両側には人家は見られず、松が点在している。戦前まで、首里にのぼる道はうっそうとした松で覆われ、夜その道で肝試しをしたという。坂道を歩く人は様々で、扇子をあおぐ人、傘をさす人、馬で駆け下る人などが見える。坂道は、弁が嶽を源流とする儀保川（ジープガー）と数か所で交わり、石造りの橋がかかっている。安里川にかかる安里橋は、規模が大きく、2本の石の橋げたが見える。橋のたもとには崇元寺の三連アーチ型の石門があり、そこから中に入ると、第二門である前堂を経て、いくつかの建物があり、一番奥に正廟が見

える。崇元寺は、王家（尚氏）の廟所であると同時に歴代国王の霊位を祀る国廟であったため、尊敬すべきものとして、石門前左右の下馬碑には、「士庶ともにここにて馬から降るべし」という内容が刻まれている。ここに描かれた西碑は沖縄戦で失われたが、東碑は今もその場に現存する。崇元寺横の広場には、外で涼む人々が描かれている。2組の男性が興じているのは中国将棋の象棋（チュンジー）だろうか。広場から左へ伸びる道は、泊高橋に至る道で、数軒ずつ石垣で囲まれた民家が続いている。道には、子を抱く女性の姿が見え、女性の着物には帯は巻かれていないようだ。（小熊誠）

16 泊村



とまりむら
泊村（現在の那覇市泊および前島）および首里の一部を描いた部分である。中山の外港であった泊港には、奄美諸島からの貢物を納める船が入港した。13世紀、こうした貢物を納める公館（泊御殿、トマリウドン）と公倉（大島倉）が聖現寺の所在地に建てられた。以後、物資の集散地として船や人が集まるようになり、村が成立した。15世紀後半

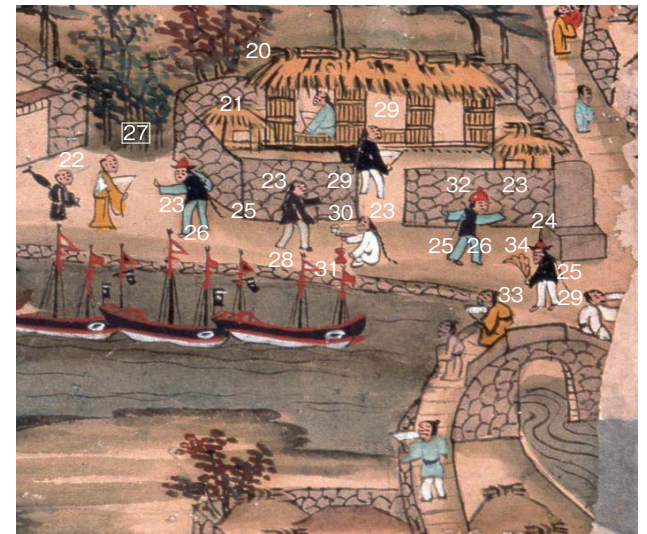


枠内を拡大表示

に臨済宗の寺として聖現寺が開山し、1671年より護国寺の住持頼昌によって真言宗となった。泊港に注ぐ安里川の河口に造られた泊高橋は、当初は木造であったが1700年に石橋に改修され、これを記念して橋のたもとに石碑が置かれた。18世紀中葉に、防波堤として石垣を備えた大道（泊前道）が造られ、さらに中道・赤平道が整備され、崇元寺橋（安里橋）へ続いていった。近世には、泊村は首里・那覇・久米とともに町方（都市部）の一部を形成し、泊頭取を筆頭に、泊村に戸籍を持つ士（士族）が村内の政務を掌った。

また画面上方には首里北部の末吉付近が描かれて

- 1 末吉宮本殿
- 2 末吉宮拝殿
- 3 烽火台？
- 4 百姓の家（茅葺き）
- 5 遍照寺（万寿寺）
- 6 チャーギ（イヌマキ）道
- 7 松林
- 8 泊村〈地名〉
- 9 土の家（瓦葺き）
- 10 聖現寺
- 11 台瀬〈地名〉
- 12 天久宮
- 13 泊前道 泊メーミチ



部分

- 14 泊高橋碑
- 15 泊高橋
- 16 泊港
- 17 琉球船（小型の山原船？）
- 18 前島〈地名〉
- 19 徒渡り
- 20 中国人漂着民の収容所
- 21 見張り小屋
- 22 僧侶主従
- 23 中国人（清人）漂着民
- 24 帽子（つば付き）
- 25 弁髪
- 26 清服①（長袖・長ズボン・袖なし上着）
- 27 琉球人僧侶と中国人が会話する
- 28 靴？
- 29 清服②（長袖上着・長ズボン）
- 30 煙管
- 31 煙草入れ？
- 32 帽子（つばなし）
- 33 清服③（巻頭衣）
- 34 クバ扇

a 社壇（壇）
b 天久之寺 アミクヌティラ

いる。末吉宮は琉球八社の一つで、首里城の北方にあった。本殿・拝殿・祭場があり、計21段の石造の階段（磴道）で結ばれている。また拝殿と祭場の間にはアーチ門があった。その下方に遍照寺（万寿寺）があり、俗に「末吉の寺」と呼ばれた。

部分図は、泊村の聖現寺付近に仮設された中国人漂着民の収容所の様子である。近世において琉球各地へ漂着した中国人（清人）は、泊村へ転送され、ここから渡船で中国まで送還されることが多かった[渡辺2003・2005]。その史料上の初見は1718年である。また朝鮮人など西洋人以外の外国人漂着民も、同様に泊村へ転送され、中国経由で自国へと送還された。漂着民は石垣の囲いの中に臨時に設け

られた仮小屋に収容され、王府の保護を受けた。当時、琉球では日本との関係を中国（清朝）に対して隠蔽する政策が採られていたことなどから、漂着民は厳重に出入りを監視・管理され、一種の軟禁状態にあった。ただし琉球の役人が付き添う形で、養生のための散歩などは適宜行われていた。この絵には、周辺の琉球人とは異なる民族衣装や髪型をした清代の中国人漂着民が仮小屋に滞在し、周辺を歩いたり琉球僧と会話をしたりする様子が生き生きと描かれている。屏風とはいえ、沖縄本島に漂着した中国人を描いた唯一の絵で、当時の様子がうかがえる貴重な史料である。（渡辺美季）

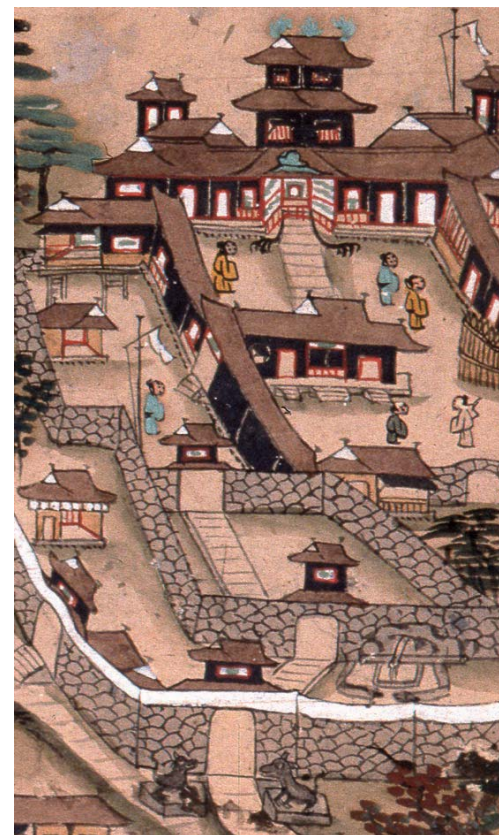
17 首里城



- 1 正殿
- 2 唐破風 カラファーフ
- 3 浮道
- 4 番所
- 5 首里森御嶽 シュリムイウタキ
- 6 北殿
- 7 御庭 ウナー
- 8 奉神門
- 9 下之御庭
- 10 広福門
- 11 漏刻門
- 12 瑞泉門
- 13 龍樋
- 14 右脇門
- 15 久慶門
- 16 飲会門
- 17 獅子の石像 シーサー
- 18 守礼門
- 19 中山門
- 20 子供を抱く
- 21 木陰に座り談笑する
- 22 円覚寺龍淵殿
- 23 仏殿
- 24 鐘楼
- 25 鐘
- 26 獅子窟
- 27 山門
- 28 円覚寺総門
- 29 仁王像(阿吽) ニオーブトゥキ
- 30 円鑑池
- 31 天女橋
- 32 弁財天堂
- 33 観音堂

a 観音堂

首里城付近を描いている。城門・石垣などの描写は平面的でおどなりであるが、現在も残り、丘から湧き出る水を吐き出す瑞泉門横の龍樋や、多くの首里城俯瞰図にある飲会門前の巨大な獅子像は描かれている。首里城などの石垣は表現されているが、中山門から城へと通じる石畳の長い坂道は、ほかの道同様に、横木を配した描写となっている。首里城の左側には琉球における臨済宗の総本山・円覚寺があり、総門と左右の脇門・中門・鐘楼などが描かれるが、今も残る放生池は描かれていない。円覚寺の総門には阿・吽の仁王様らしき像が見える。円覚寺や首里城の大部分は沖縄戦で破壊され、建築物の壁は戦後、鮮やかな朱色で復元



部分

されたが、本図では首里城の壁は黒を基調に描かれている。円覚寺前には、首里城周辺から湧き出た水をたたえた円鑑池があり、中之島の弁財天堂、堂へ渡る天女橋も描かれている。円鑑池下部に「観音堂」(慈眼院観音堂)が大きく描かれているが、実際この付近にあるのは円鑑池からの水を落とした龍潭と、園比屋武御嶽である。首里城と周囲は、他の絵画からの引用や類型的な図像で描かれ、現実の景観と矛盾が生じている。しかし本図の首里城付記の描写は、本作と類似点が多い「琉球貿易港図屏風」(参考図版I)と比べれば、詳細である。(富澤達三)

参考図版 I



琉球貿易図屏風

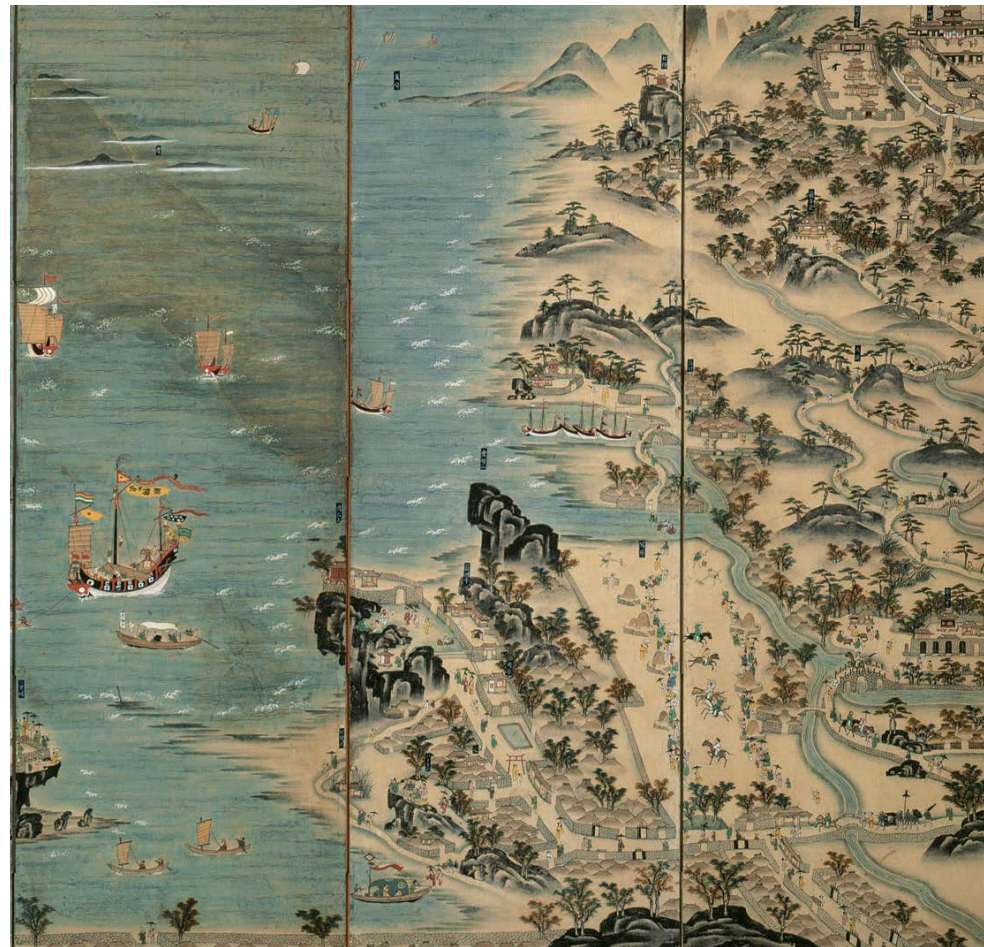
六曲一隻

紙本着色

縦 175.0 cm 横 343.6 cm

19 世紀

滋賀大学経済学部附属史料館蔵





参考図版Ⅰ 左



参考図版Ⅰ 中央



参考図版 I 右



部分① (中央)



部分② (右)



部分③ (左)



部分④ (右)

参考図版Ⅱ



琉球進貢船図屏風

六曲一隻

紙本着色

縦 94.5cm 横 255.0cm

19 世紀

京都大学総合博物館蔵





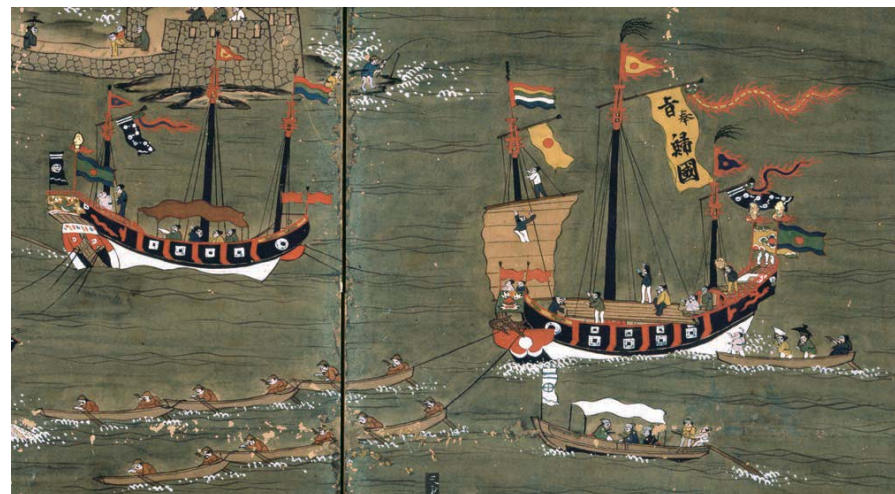
参考図版Ⅱ 左



参考図版Ⅱ 中央



参考図版Ⅱ 右



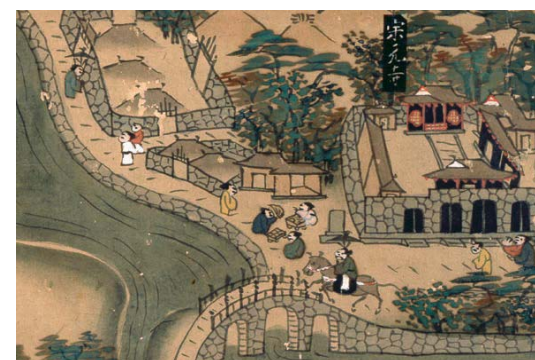
部分①（中央）



部分②（右）

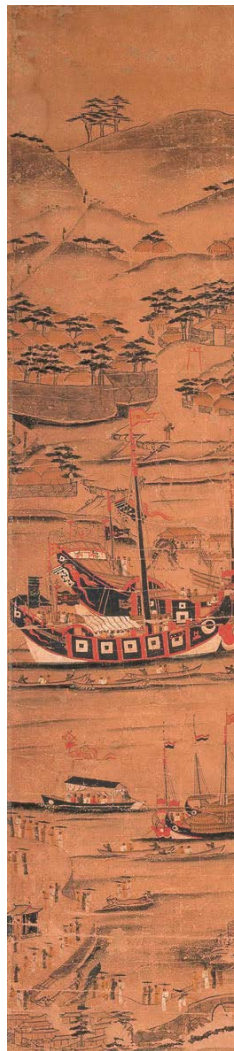


部分③（左）



部分④（右）

参考図版Ⅲ



琉球交易港図 三幅（掛軸装）

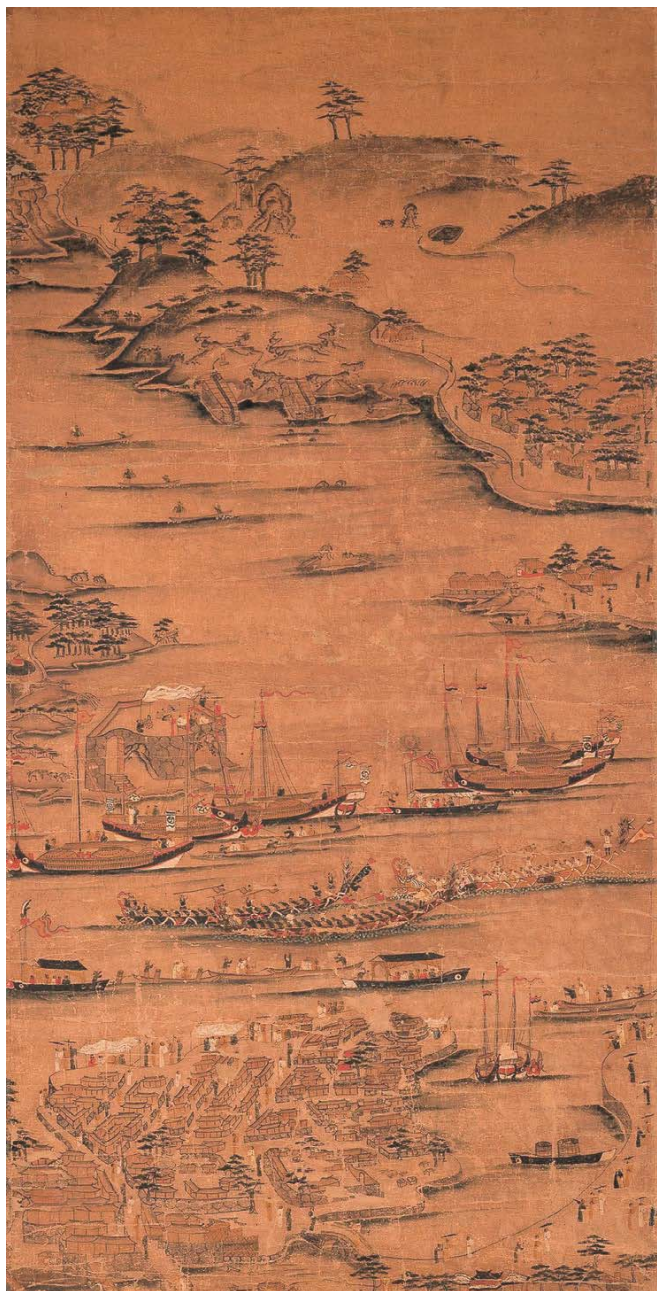
紙本着色

（左）縦 107.6cm 横 55.1cm （中）縦 106.7cm 横 55.0cm （右）縦 104.0cm 横 53.8cm ※修復前

（三幅共）縦 111.6cm 横 55.7cm ※修復後

19 世紀

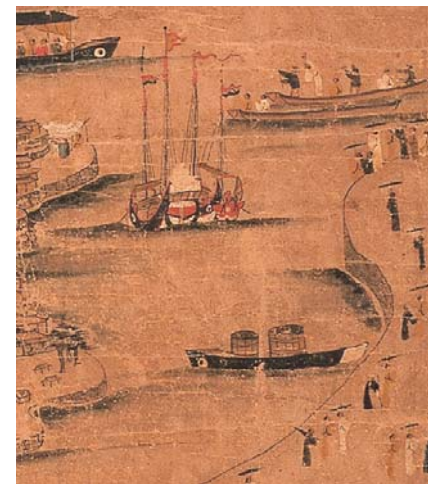
浦添市美術館蔵



参考図版Ⅲ 左



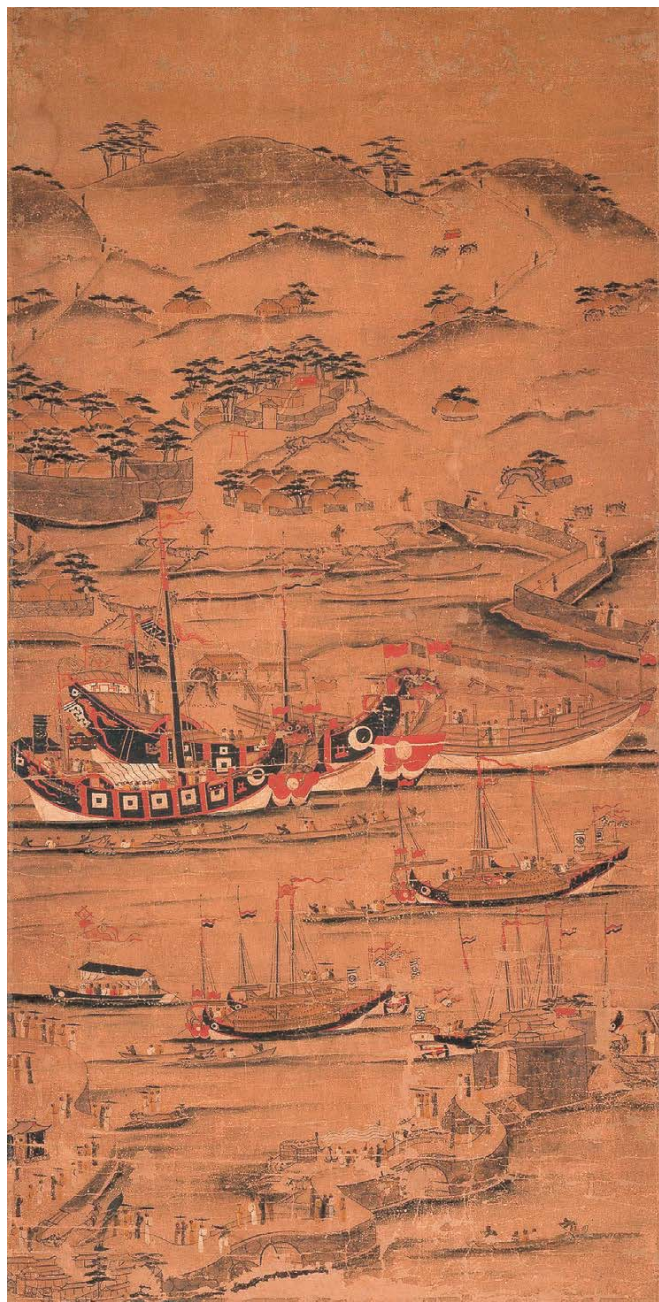
部分①（落平）



部分②（水売船）



部分③（御物城・ハーリー）



参考図版Ⅲ 中央



部分④（すら場）



部分⑤（官船）



部分⑥（臨海寺）



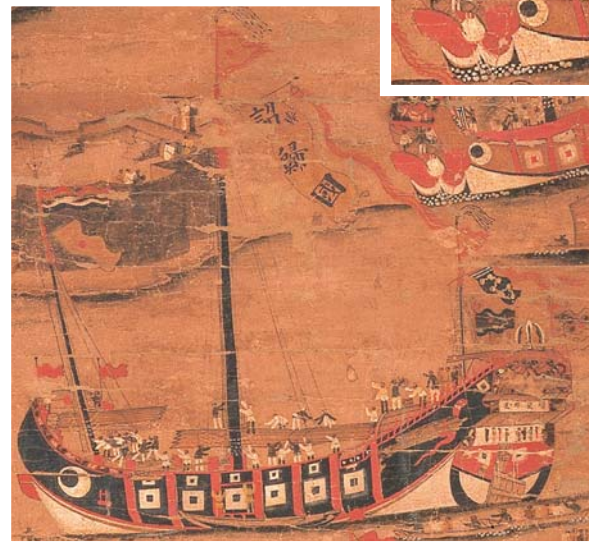
参考図版Ⅲ 右



部分⑦ (冠船 1)



部分⑧ (冠船 2「奉旨冊封」)



部分⑨ (進貢船「捧詔帰国」)

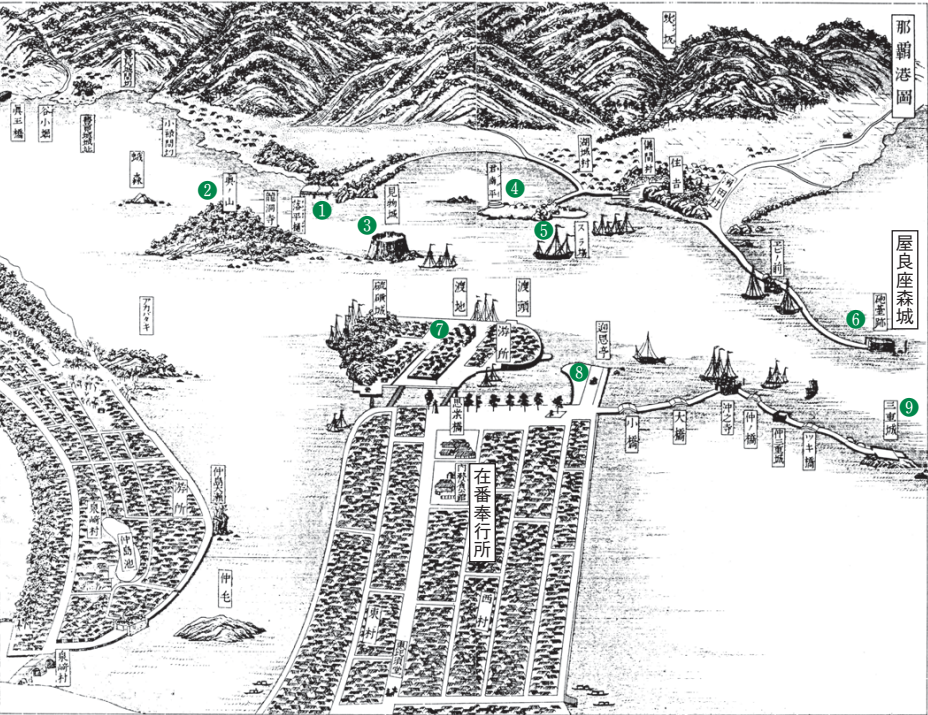


部分⑩ (三重城)

参考地図 (伊地知貞馨『沖縄志』1877年刊より)



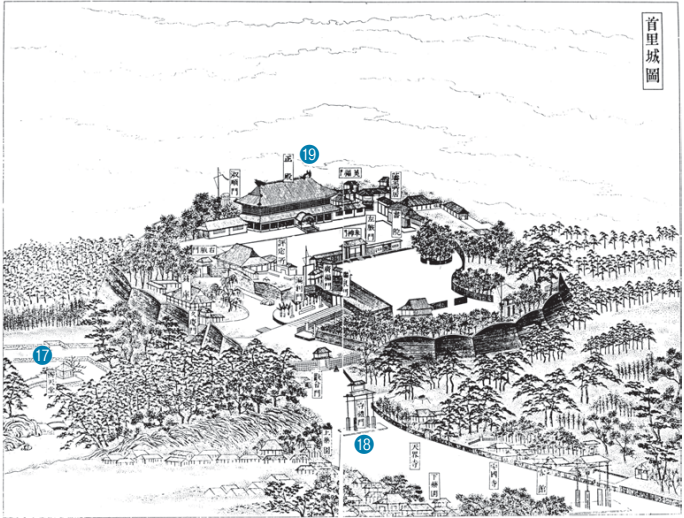
I 那覇港図

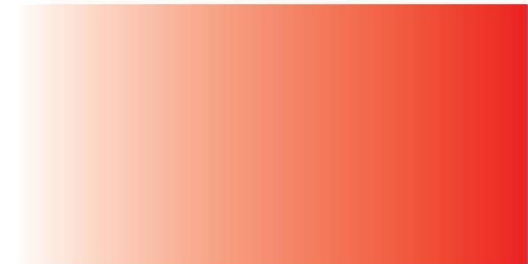


II 那覇及久米村図



III 首里城図





解題と考察

渡辺 美季

I 「琉球交易港図屏風」考

はじめに

「琉球交易港図屏風」(浦添市美術館蔵)【下図】には、琉球王国の港町・那覇のにぎわいと、首里城を中心とする城下の様子が俯瞰的に描かれている。

絵図の主役は、中国ー琉球を往来する琉球の官船・唐船で、空砲を放って到着を知らせ [a]、曳船に曳かれて港口にさしかかる進貢船 (帰唐船) [b] や、港内に停泊する接貢船が描かれている [c]。いずれも赤を基調とした中国式ジャンク型の大型船舶である。帰唐船には、丸に十文字の旗を掲げた薩摩役人の小舟が荷改めのために近づこうとしている [d]。

港内では、サバニと呼ばれる3艘の小舟 (爬竜船) による船漕ぎ競漕 (ハーリー) [e] が行われ、その周辺に停泊する一本マストの大和船 (薩摩船) や、小舟・屋形船から琉球人・薩摩人がハーリーを見物している。陸上でも薩摩役人の一行 [f] を含む大勢の人々がハーリーを見物し、その中には赤い着物姿の遊女が入り交じっている。

絵図左上には、港内に投網して漁をする小舟 [g]

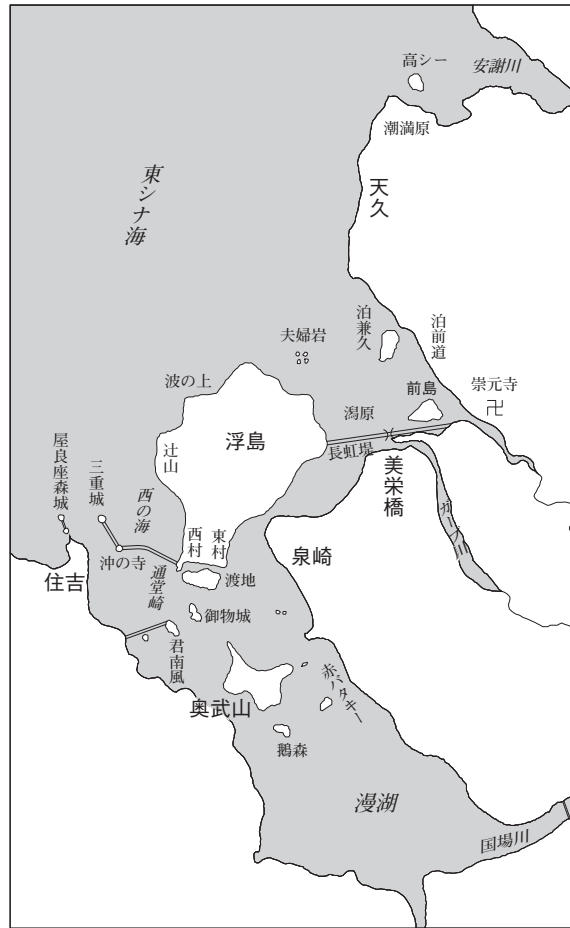
と、船舶や周辺住民の貴重な水源である落平^{ワテイナ}の湧水を汲む水売船 [h] が描かれている。

絵図右方に目を転じると、波之上宮 [i]・護国寺 [j]・天尊廟 [k] などの宗教施設が建ち並び、絵図右下には湯原^{カタハル}の塩田 [l] が広がっている。塩田では製塩作業とともに、競馬が行われている。絵図右隅では琉球高官の行列 [m] が橋を渡っている。湯原^{カタハル}の上方には泊港を有する泊村 [n] があり、中国人漂着民と見られる人々が描かれている。絵図右端には、国王の霊位を祀る崇元寺 [o] や王家の菩提寺である臨濟宗の円覚寺 [p]、首里城 [q] が連なっている。

この屏風は、19世紀 (近世末～明治期) に制作されたと考えられ、当時の生活文化に関わる豊富なモチーフが含まれている。⁽¹⁾「人々の日常生活を図像資料から引き出して、特定の過去を知る手がかりとする」[福田 2007] という生活絵引の編纂目的にふさわしい、魅力的な素材と言えよう。



「琉球交易港図屏風」全体図 (次ページの参考図も参照のこと)



参考図：1700 年頃の那覇⁽²⁾

1 那覇港を主題とする屏風群

現在「琉球交易港図屏風」とよく似た屏風が4点、屏風から軸装に改められたとみられる絵図1点が確認されている。いずれも、中国から帰国した進貢船を中心に那覇と首里（あるいは那覇のみ）を俯瞰する構図で、港周辺のにぎわいを描くものである。またハーリー（船漕ぎ競漕）やその見物人が描かれている点でも共通している。なかでも「琉球交易港図屏風」を含む3点の屏風（後述の①～③）

は著しく類似しており、同じ工房で制作された可能性が指摘されている〔板井 2008〕⁽³⁾。

「琉球交易港図屏風」の性質や内容を理解するためには、これらの類図の全体像の把握が必要であり、かつ有効であろう。そこで本稿ではまずこの課題に取り組みたい。なお管見の限りで6点の屏風全てを扱った研究は、各図に描かれた船舶の比較検討を主眼とする〔板井 2008〕のみである。

(1) 概要

「琉球交易港図屏風」を含む計6点の屏風（ただしうち1点は掛軸装）の概要と収蔵の経緯、主な特徴は次の通りである。

①琉球交易港図屏風〔1章・絵引〕

浦添市美術館蔵

紙本着色、縦 120.0cm 横 290.0cm

六曲一隻、19 世紀

収蔵の経緯：1886（明治 19）年頃に沖縄に赴任した鹿児島県の警察官・高良八十八氏が、土産物として沖縄で入手した屏風から絵の部分だけを持ち帰ったとみられ、氏の遺族から、1987（昭和 62）年に浦添市博物館準備室に寄贈された。その後、同美術館で屏風に改装・修復された〔謝敷 1998a、安里 2009〕。

主な特徴：透明感のある色彩で、那覇港と首里を描く。②・③と極めて類似しており、両図と比べて、描かれた内容に実態・事実をより反映している可能性がある（2 に後述）。泊村に中国人（清人）漂着民と見られる人々が描かれている唯一の屏風である。

②琉球貿易図屏風〔1章・参考図版Ⅰ〕

滋賀大学経済学部附属史料館蔵

紙本着色、縦 175.0cm 横 343.6cm

六曲一隻、19 世紀

収蔵の経緯：1962（昭和 37）年に彦根市の松井六三郎氏から寄贈された〔岩崎 2001b〕。2000 年に行われた修復作業の際、下貼文書から文政末年（1830 年頃）に作成された薩摩藩江戸藩邸の帳面が発見された〔岩崎 2001a〕。

主な特徴：①・③と極めて類似しており、3 図の中では最も画面が大きい。①と同じく透明感のある色彩で那覇と首里を描く。進貢船（帰唐船）の荷改めに向かう薩摩役人が乗り込んだ4艘の小舟に「唐物方」の旗が描かれている〔豊見山 2004a〕。国廟である崇元寺の記載が宗元寺、道教の天尊廟の記載

が天孫（廟）となっている。

③琉球進貢船図屏風〔1章・参考図版Ⅱ〕

京都大学総合博物館蔵

紙本着色、縦 94.5cm 横 255.0cm

六曲一隻、19 世紀

収蔵の経緯：1932（昭和 7）年 4 月に京都大学国史研究室が購入した（購入元は不明である）。

主な特徴：①・②と極めて類似しており、3 図の中では最も小さい。このため両図には描かれている首里城が描かれていない。また沖合（上部）の渡名喜島や慶良間諸島も描かれていない。水分の少ない顔料で描いたと見られ、①・②に比べ不透明感が強い。また①・②の繊細な筆遣いにに対し、やや太めの線による力強い筆遣いが特徴的である。

④琉球交易港図〔1章・参考図版Ⅲ〕

浦添市美術館蔵

紙本着色、縦 111.6cm 横 55.7cm（3 幅共、修復後）

掛軸装（3 幅）、19 世紀

収蔵の経緯：1993（平成 5）年に沖縄県内在住（当時）の堀川政吉氏より寄贈された。堀川氏は義父の上原氏（名前は不詳）よりこの図を贈られたという。上原氏がなぜこの図を所有していたのかは不明である。

主な特徴：本来は屏風仕立てであった作品の四方が断ち切れ軸装に仕立てられたと考えられ、⁽⁴⁾欠損部がある。全体的に劣化しており、横折れや亀裂による損傷が激しく、これに伴う剥落・欠失も多い〔関地・庄野 1998〕。

構図は①～③の左4曲とほぼ同じ、すなわち右2曲（那覇西岸部・首里）が切れた状態である。画風は①～③とは異なっており、別の作者ないしは工房の作と考えられる〔板井 2008〕。①～③および⑤同様、左端の落平に2本の槓が見えることから、槓が1本から2本に増設された1807年以降に描かれたと見られる。

この図の最大の特徴は、琉球国王を冊封する中国

皇帝の使者船・冠船（封舟）2 隻が描かれている点である。右軸上部に描かれた1 隻が大砲を放って入港を知らせ、中央には「奉旨冊封」の旗を掲げたもう1 隻が港口に迫っている。いずれも赤を基調とした船体である。その手前に「捧詔冊封」の旗を掲げた琉球の進貢船が航行している。護送の船であろうか。進貢船は赤と黒で描かれ、冠船とは異なる配色である。右下の三重城には、太鼓やラッパ、旗を持つ人々が立ち並び冠船を出迎えている。中国伝来の道中楽である路次楽と思われる。

中央軸には、2 隻の琉球官船が描かれている。中国往來の官船である唐船（進貢船・接貢船など）か、あるいは薩摩に派遣される楷船であろう。その後方の、スラ場（スラ所）と呼ばれる造船所には、造船中と見られる唐船1 隻が描かれている。これも他図には見られない特筆すべき点である。下部の海上道路の中ほどに見える黒い線で描かれた物体は、船の鉄錨であろうか。左軸には、上方から落平・御物城・ハーリー・渡地などが描かれている。落平と渡地付近の海上には水売船が見える。

さらに写真画像を肉眼で観察した限りでは、この図には、他図に描かれている薩摩船や薩摩役人が描かれていないようである。2 隻の冠船とともに、本図を特徴づける非常に重要な点であると言えよう。

⑤首里那覇港図屏風

沖縄県立博物館蔵

紙本着色、縦 98.8cm 横 334.4cm

八曲一隻、19 世紀

収蔵の経緯：1889（明治 22）年に新潟県の山口なる人物が鹿児島で買い求め、その後イギリス人の日本研究者フランク・ホーレーの手に渡った。1959（昭和 34）年に沖縄県立博物館の前身である琉球政府立博物館が購入した。以前は「琉球国祭神の図」という画題が付けられていた。かつて琉球国王から島津藩主へ献上されたという伝承がある〔沖縄県教育庁文化課 1978〕。

主な特徴：八曲という横長の画面ゆえに、他図では

省略ないしは一部分しか描かれていない首里城の全体が描かれている。またサイズの関係で他図には描き切れなかったとみられる要素——識名御殿（右端）や真玉橋（左端）など——も描かれている〔九州国立博物館 2006〕。波之上宮沿岸と沖合に、白青赤の三色旗を掲げた仏（または露・蘭）の船舶が1 隻ずつ描かれている〔板井 2008、堀川 2008〕。

⑥那覇港図屏風

首里城公園蔵

紙本着色、縦 108.0cm 横 247.5cm

六曲一隻、19 世紀

収蔵の経緯：数次にわたる所蔵者変更を経て、2000 年より首里城公園が所蔵している。

主な特徴：他図とは異なり、垣花からの視点で那覇のみをアップで描き、首里や沖合といった遠景は切られている〔首里城公園管理センター 2002、九州国立博物館 2006〕。最も絵画的な完成度の高い作品で、細部まで描き込まれているが、どの船も寸詰まりに描かれるなどデフォルメも目立つ〔板井 2008〕。ハーリーとともに、ユッカヌヒー（旧 5 月 4 日）に行われた玩具売りの様子が描かれている点の特徴で、進貢船や馬の玩具が確認できる〔首里城公園管理センター 2002〕。

〔備考〕写真画像について

この絵引には①～④の詳細な写真画像を収録している。④は〔関地・庄野 1998〕に復元前後の状態を示すカラー写真が掲載されているが、詳細な画像を載せるのは本書が初めてである。

本書に画像を収録していない⑤・⑥は、〔沖縄美術全集刊行委員会 1989〕に詳細な写真画像が掲載されている。また〔九州国立博物館 2006〕にも、①～③および⑤・⑥の詳細な写真画像が掲載されている。

(2) 構図

「琉球交易港図屏風」を含む屏風群の最大の特徴は、那覇港を俯瞰的に描く構図であろう。堀川彰子氏によれば、那覇を俯瞰的に描こうとする試みは 18 世紀前半に首里王府の絵師・殷元良（座間味庸昌、1718-1767 年）によって初めて行われた〔堀川 2008〕。これは比較的自然的な俯瞰的絵図であったが、その後、殷元良に師事した王府の絵師・呉著仁（＝呉著温・屋慶名政實、1737-1800 年）が、この構図を大きく変化・発展させ、1770 年代に制作した「首里那覇全景図屏風」^⑥において、那覇港の中心上空を想定して空間を極端に湾曲させる構図を創始した〔同前^⑦〕。これが一連の屏風群に受け継がれたと考えられる〔同前〕。

(3) 制作年代

屏風群の制作年代に関しては、那覇沿岸部の湧水である落平の樋に着目した謝敷貞起子氏の研究が嚆矢をなす〔謝敷 1998b〕。謝敷氏は①を分析する中で、従来1 基であった水樋が、1807 年 12 月に2 基に増設された史実に着目し、制作年代の上限を 1808 年、下限を原蔵者・高良氏が①を入手した 1887（明治 20）年頃とした〔同前〕。落平の2 本の樋は、①～⑤に共通して描かれていることから、少なくとも上限に関しては謝敷氏の推定が該当するものと考えられる。

その後、岩崎奈緒子氏が、2000 年に行われた②の修復作業で下貼文書から文政末年（1830 年頃）に作成された鹿児島藩江戸藩邸の帳面が発見されたことから、屏風の成立は 1830 年代後半以降であり、「明治期には下らない」と推定した〔岩崎 2001a〕。

さらに同じく②に関して、豊見山和行氏が、進貢船（帰唐船）の荷改めに向かう薩摩役人が乗り込んだ 4 艘の小舟に薩摩藩の「唐物方」という部署の旗が描かれていることを指摘し、この部署が 1844 年に「産物方」と改称されたことから、先行研究の成果と合わせて 1830 年代後半から 1844 年までの

期間に成立したものと結論づけた〔豊見山 2004a〕。「唐物方」と記されていないものの、①・③にも進貢船（帰唐船）の荷改めに向かう薩摩役人の小舟が②同様に描かれており、豊見山氏の推定年代が適用できるものと思われる。

一方、⑤に関しては堀川彰子氏が、白青赤の三色旗を掲げた 2 隻の船舶が描かれている点に着目し、絵図中の旗に一致する国旗はないものの、同配色の国旗を持つ仏・露・蘭の内、最も早期に琉球を訪れたのが 1844 年の仏船であることから、制作年代の上限をこの年とする〔堀川 2008〕。ただし 1844 年に来琉した仏船はアルクメヌ号 1 隻であり、船数は一致していない（次の仏船来琉は 1846 年で船数は 3 隻である）〔大熊 1971〕。

(4) 描かれた「瞬間」

ところで屏風群に描かれたのは、どのような「瞬間」なのであろうか。豊見山和行氏は②の分析から、潟原での競馬は旧正月 21 日か 27 日、ハーリーは旧 5 月 4 日に実施される慣わしであったこと、進貢船の帰国は概ね旧 5～6 月で、抜荷（密貿易）防止の観点から帰港時には関係者以外の船舶の接近は禁じられており、ハーリーが同時に実施されることは実際にはなかったであろうことを指摘し、那覇の「ある瞬間」ではなく、「同時には発生し得ないものも含む複数の瞬間」が描かれているとする〔豊見山 2004b〕。ハーリーは全屏風に、進貢船の帰港は④を除く全てに描かれ、④に描かれた冠船入港時にも進貢船同様かそれ以上の監視体制が敷かれたものと考えられるため、豊見山氏の指摘は全図にほぼ該当するものと思われる。

一方で、①には泊村に収容される通例であった中国人漂着民が、唯一描かれている。琉球各地に漂着した外国人は、18 世紀前半頃から、漂着地から自船で直接帰国する者を除いて、原則的に泊村に転送され、村内に設けられた仮小屋に収容されて、帰国（多くは送還）の時を待った〔渡辺 2003〕。その地点を比較すると、①には中国人（清人）の一行とと

もに、仮小屋や見張り小屋までもが確認できるが、②・③は空き地になっている [1-(4)-①~③]。すなわち①には、何らかの漂着事件が発生し、その難民が泊村に収容された、極めて時事的な「瞬間」が反映されている可能性が高いのである。この光景が描かれた理由は不明だが——絵師がその時に見たものがたまたま描かれたのであろうか——、このような時事的な要素も含め、屏風群に描かれた可能性のある「瞬間」については、今後もより検討を進める必要があると思われる。

(5) 制作目的

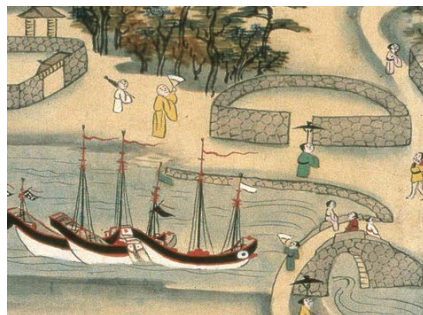
では屏風群はどのような目的で誰に向けて制作されたのであろうか。確実に言えることは、少なくとも④を除いて、中国（清朝）向けに制作されたものではないということである。⁽⁸⁾

琉球は1609年に薩摩の島津氏に敗北し、中国（明朝）と日本（江戸幕府・薩摩藩）に二重に従う王国となった。その後1644年に明から清へと中国の王朝が交替すると、琉球は清と新たな君臣関係を結んだが、日本との関係が清の不興を買うことを恐れ、清に対して琉日関係を隠蔽する特別な政策を採るようになった [紙屋1990]。また新興の大国である清と、琉球支配を原因とした摩擦が生じることを避けた幕府、その意向を汲んだ薩摩も、琉球の隠蔽政策に協力した [同前]。こうして清を中心とした東アジア世界においては、琉球と日本との関係は少なくとも表向きは「存在しないこと」となった。従って、薩摩役人や薩摩船が描かれている④以外の屏風類は、決して清や、その朝貢国である朝鮮に向けて描かれた作品ではないことは明らかである。

では日本に対してはどうであろうか。豊見山和行氏は②に関して、薩摩藩の江戸藩邸において屏風に仕立てられた可能性が高いとする岩崎奈緒子氏の指摘や [岩崎2001a]、唐物方・薩摩船・薩摩役人が明瞭に描かれている点などから、この絵図の注文主が薩摩藩、広く言えば日本であった可能性を指摘する [豊見山2004a]。



1-(4)-①



1-(4)-②



1-(4)-③

1609年の琉球侵攻後、薩摩藩は琉日間のヒト・モノの動きを自らの統制下に置いたため、琉球へ渡航できる日本人は、藩から琉球監督のために派遣され那覇に駐在する在番奉行衆と、藩の委託を受けて琉球の年貢米・砂糖などを運送し、代わりに琉球で商売を行う薩摩船の関係者（船頭・水主など）にほぼ限られるようになった。こうした琉薩間の交流に

より薩摩に渡ったとみられる琉球の芸術品・美術品（著名な書家の作品等）は、現在も鹿児島県各地に多数散在しており、那覇・首里の屏風もこの交流の中で薩摩——広くは日本——へ向けて制作された可能性は大いにあるだろう。

或いはより具体的に、琉球を訪れた薩摩の在番奉行衆や海商らの土産として作成されたのかもしれない。⁽⁹⁾ 実際①は、1886（明治19）年頃に沖縄に赴任した鹿児島警察官が土産物として入手した屏風であり、王国時代に屏風が薩摩への土産であったのであれば、王国滅亡（1879年）後にも、その遺物が存続していた可能性がある。

また②・③の来歴などから、屏風の一部は薩摩を通じて日本にも流入・流布した可能性が高いと考えられる。これらの異国情緒溢れる屏風は、南蛮屏風などとも通じる魅力をもって、「鎖国」下の日本人々に珍重されたであろう [九州国立博物館2006]。

なお④には、他図に描かれている薩摩船や薩摩役人が見られない。先述した清に対する琉日関係の隠蔽政策のため、清使（冊封使）の乗る冠船入港時の那覇に薩摩の船や人が描かれないのは、現実において言えば当然のことであるが、必ずしも現実を反映する必要のない観賞用絵画において、他図に共通する日本的要素が省略されているのはなぜであろうか。差し当たり思いつくのは、[a] 清に向けて制作された、[b] 国内消費用に制作された（＝来琉する清人の目に触れる可能性がある）、[c] 単に事実を反映して制作された、といった可能性だがどれも推論の域を出ない。この点に関しては今後の大きな検討課題である。

(6) 制作者

最後に、誰が屏風を制作したのかという点について考えたい。屏風は内容の具体性から全て琉球——恐らくは都市部である那覇か首里——で制作された可能性が高いと考えられるが、具体的な制作者や工房に関する手がかりは今のところ皆無である。

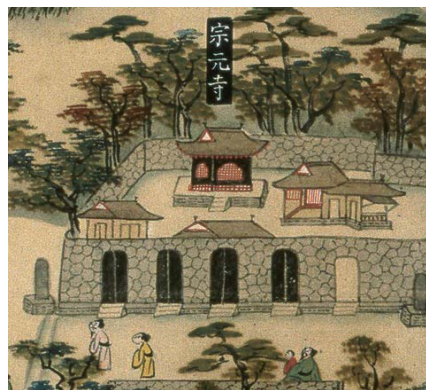
ただしあくまでも推測であるが、②に関しては「おそらく首里王府お抱えの絵師の手になる可能性が高いと推測されるものの、その詳細は不明である」 [豊見山2004a]、「漆器製作をつかさどる貝摺奉行所の絵師が描いたものではないかと考えられる」 [安里2000] という指摘がある。貝摺奉行所とは首里王府の工芸機関で、所属の絵師や貝摺師——多くは下級の士（士族）——が、王府の用にかかる絵画や漆器——清・幕府・薩摩への献上品も含まれていた——の制作に当たっていた。

また6点の屏風群の中で最も絵画的な⑥に関しても、「人物表現、爬龍船・進貢船などの描写から、貝摺奉行所に配置されていた絵師のようなしつかりとした技術を持った人物の筆になるものと思われる」との指摘がある [首里城公園管理センター2002]。

一方、①~③および⑤を比較した加藤健二氏は、共通する幾つかのモチーフの中にある相違点から各図の描かれた時期が異なっていること、ヒトの図像の表現に見られる描き進め方や彩色方法のパターンから共同制作の可能性や工房の存在がうかがえることを指摘している [加藤2007]。

加藤氏の指摘に、先に挙げた「貝摺奉行所の絵師による制作」という推論を加味すると、共同制作の場として自ずと貝摺奉行所の可能性が浮上するが、薩摩藩邸で屏風に仕立てられたと見られる（＝藩が注文主であった可能性がある）②は、琉球の国廟・崇元寺を宗元寺、道教の天尊廟を天孫（廟）と記しており [1-(6)-①・②]、これは王府機関による表記としては一般的ではないように思われる。従って貝摺奉行所そのものというよりは、その絵師が何ら

かの形で関与した民間の（私的な）工房で、官・民ともに参加可能な市場向けの商品として制作された可能性が高いと言えるのではないだろうか。



1-(6)-①



1-(6)-②

2. 「琉球交易港図屏風」の比較検討

—生活文化を中心に—

次に本書で絵引として取り上げた「琉球交易港図屏風」(①) および①と極めて類似する「琉球貿易図屏風」(②、参考図版Ⅰ)・「琉球進貢船図屏風」(③、参考図版Ⅱ)を、日常生活文化に関わる描写を中心に比較検討したい。

なお本書には、これまで詳細な写真画像が刊行されてこなかった「琉球交易港図」(④)も参考図版Ⅲとして収録したが、すでに触れたように④は①～③とは性質が異なる絵図であるため、ここでは比較分析の対象としないこととする。

(1) 落平・奥武山

屏風左上の落平・奥武山付近の描写には、日常生活の場としての那覇港の様子がよく現れている。

落平では、①～③とも湧水が流れる2基の樋を描き、2つの樋を積んだ水売船がその水を汲んでいる。②・③はさらにもう1隻の水売船が見える。①・②は落平の手前に投網をする漁師の小舟が描かれるが、③には見えない。

また①では、奥武山の龍渡寺の鎮守社（社名不詳）ははっきりとした赤で塗られているが[2-(1)-①部分]、②は僅かに赤線を用いる程度、③には赤色は見えない。なお他の部分に描かれた神社は①～③とも赤色に塗られている。



2-(1)-①



2-(1)-①部分



2-(1)-②



2-(1)-③

(2) 接貢船・ハーリー

屏風左方中央は、那覇の主要な祭礼の一つであるハーリー（船漕ぎ競漕）を中心とした場面である。

①は接貢船の両側に薩摩船が1隻ずつ描かれ、③では接貢船の右手に2隻の薩摩船が描かれる。②は「接貢」の旗が描かれていない。接貢船の上で太鼓を叩く男性は①のみに描かれている [2-(2)-①部分1]。ハーリーの小舟は③のみ横並びに描かれている。

ハーリーの見物客が乗る屋形船の旗頭は①～③とも異なっている。愼思九（しんしきゆう いずみかかんえい 泉川寛英、1767-1844 年）



2-(2)-①



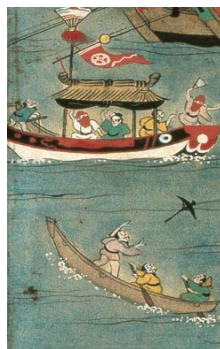
2-(2)-②



2-(2)-①部分1



2-(2)-②部分1



2-(2)-②部分2

「那覇綱引之図」に照らすと、①の旗頭は湧田のものであるようだ〔鎌倉 1982（写真編）：P.286-291〕⁽¹¹⁾。

①の屋形船には何らかの紅白の物品（食品か）を入れた籠や [2-(2)-①部分3]、鳥面を付けた人物が見える〔同部分2〕。②には日傘や扇を振り回す人が描かれ [2-(2)-②部分1]、②・③には傘を飛ばされる男性の姿がある [2-(2)-②部分2、2-(2)-③部分2]。

薩摩船の上では、琉球人男性・琉球人遊女（赤地や赤柄の着物）が乗り込んで、薩摩人男性（丁髷・髭なし）とともに見物している [2-(2)-①～③部分4]。日常的な琉薩交流の実態を反映しているのだろうか。



2-(2)-③



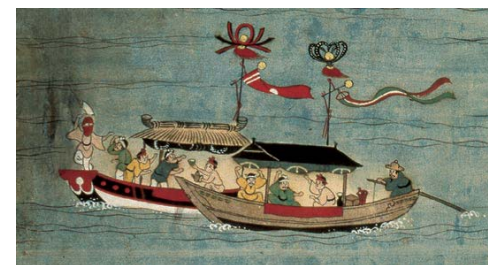
2-(2)-①部分2



2-(2)-①部分3



2-(2)-③部分1



2-(2)-②部分3



2-(2)-③部分2

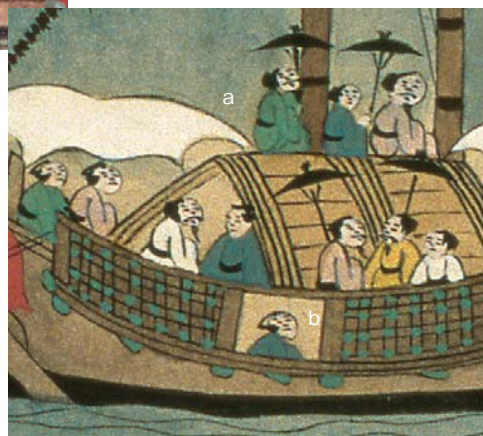


2-(2)-③部分3

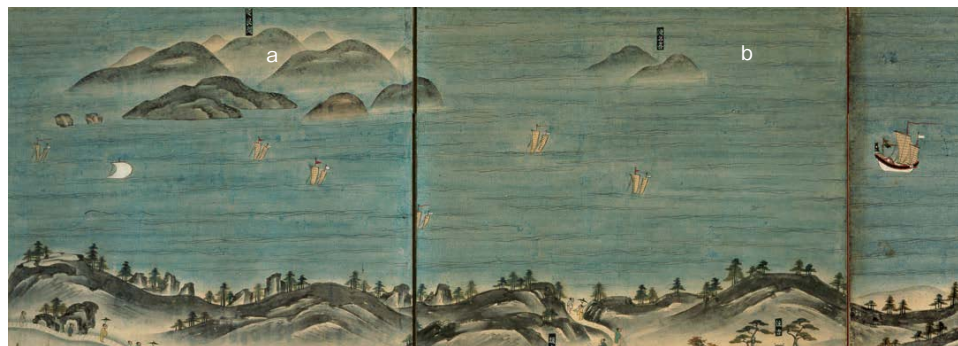


2-(2)-①部分 4

- a 琉球人男性
- b 薩摩人男性（丁髷・髭なし）
- c 琉球人遊女（赤い着物）



2-(2)-②部分 4



2-(3)-②



2-(2)-③部分 4

なおハーリーと同様に那覇の主要な祭礼であった綱引（那覇大綱引）は描かれておらず、⑥に描かれたような露店も見えない [豊見山 2004b]。

(3) 帰唐船・港遠景

屏風中央の上方には、中国から那覇港に到着した帰唐船の様子と沖合の風景が描かれている。

①・②の沖合には、慶良間諸島・渡名喜島・慶伊干瀬（チービシ）が描かれているが、③は慶伊干瀬のみである。帰唐船は、船体・大砲の向きや火炎の色が異なっている。

- a 慶良間か
- b 渡名喜か
- c 慶（付箋剥落）
- d 美崎（付箋剥落）



2-(3)-①

- a 慶
- b 美崎



2-(3)-③

- a 慶良間
- b 渡名喜
- c 慶
- d 美崎





2-(4)-①



2-(4)-①部分 1



2-(4)-②



2-(4)-②部分 1



2-(4)-③



2-(4)-③部分 1

(4) 迎恩亭・三重城

屏風下方の中央から左にかけては、迎恩亭の薩摩役人を中心に、ハーリーや進貢船を見物する人々の様子が描かれている。

③のみ迎恩亭内の東屋が2棟あり、大きい東屋が門に対して横向きに配置されている。迎恩亭の東屋は假小屋であったため、過去のいずれかの時点の実態が反映されている可能性がある。①のみ薩摩役人と琉球人のそばに酒器・盃・煙草盆のような物品

が見える [2-(4)-①部分 1]。また迎恩亭の右脇に描かれた屋根付きの小屋の下に、①では桶が、②・③では甕のようなものが置かれている。なお迎恩亭の表記に関して、①に記載はなく、②には「迎恩門」、③には「迎恩」の付箋がある。

迎恩亭から海上の薩摩船に向かう小舟を見ると、②には役人を含む薩摩人とともに、遊女2名が乗



2-(4)-①部分 2



2-(4)-①部分 3



2-(4)-②部分 2



2-(4)-②部分 3



2-(4)-③部分 2



2-(4)-③部分 3

り込んでおり、薩摩人1人が薩摩船に手を掛け、まさに乗り移ろうとしている [2-(4)-②部分 2]。①には薩摩役人の姿はなく、遊女2名と薩摩人水主のみである [2-(4)-①部分 2]。

次に三重城に繋がる海上道路に立ち並ぶ見物人から、人物描写を比較する。①～③とも、帯の有無で男女を描き分けているようである。琉球人男性は、

髭の有無による描き分けがなされている。髭のない者が若者であろう。子供は赤い着物姿で、多くの場合、母親らしき女性に抱かれるか、父親らしき男性に背負われるかしている。⁽¹²⁾遊女は赤地ないしは赤柄の衣裳を着ている。扇は白、傘は黒で描かれるが、①のみ傘下の棧の部分が省略されている。団扇を持つ人物もいる。薩摩の役人は、丁髷で髭がないことに加え、日本刀と羽織・袴を身につけている点の特徴である。

(5) 西の海・若狭

屏風の右手前には、那覇港西岸部の様子が描かれている。

遊里である辻村に近い西の海の沿岸では、漕ぎ寄せた屋形船に遊女が乗り込もうとしている。①では降ろした幕の下から男たちが覗く中、肝入（肝煎）に誘導されて2人の遊女が船に向かってる [2-(5)-①部分 1]。②では肝入はおらず、船上の男性の呼びかけに遊女が応じる形をとる [2-(5)-②部

分 1]。③は船上から呼びかける男性も肝入も描かれており、幕は上げられている [2-(5)-③部分 1]。

その右上のバクチャ（博奕屋）で車座になって宴会を開く人々に対し、崖下から②では男性が、③では女性が手を振っている [2-(5)-②・③部分 2]。③の宴では、上半身裸の男性、地べたに倒れ込みそうな男性、両手に扇を持って激しく煽る男性が描かれ、酒に酔いつづブーサー（琉球式じゃんけん）に熱狂している様子が最も強く表現されている [2-(5)-③部分 2]。



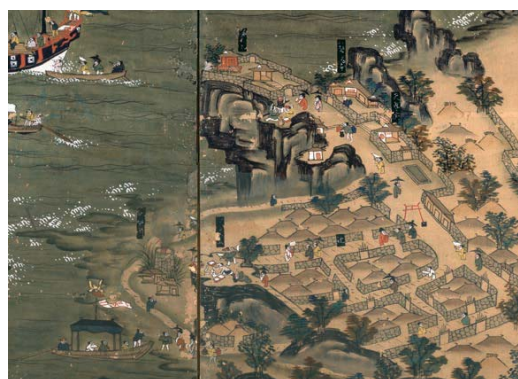
2-(5)-①



2-(5)-①部分 1



2-(5)-①部分 2



2-(5)-③



2-(5)-①部分 3



2-(5)-②

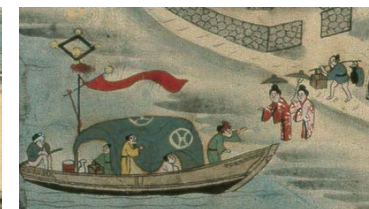


2-(5)-③部分 1



2-(5)-③部分 2

a 砂焼所 b バクチャ c 辻



2-(5)-②部分 1



2-(5)-②部分 2



2-(5)-②部分 3 a 砂焼場



2-(5)-②部分 4

さらに上方の唐守嶽前の広場でも宴会が行われているが、この場面では②に上半身裸の男性が見える[2-(5)-②部分4]。全ての宴に遊女が待っている。なお①・③では鳥居の右手の辻村に遊郭を訪れ



2-(5)-①部分4



2-(5)-③部分3
a 護国寺



2-(6)-①

たとえられる薩摩人の姿が見える。

護国寺は、①では仁王と鐘が[2-(5)-①部分4]、②では鐘が描かれているが[2-(5)-②部分5]、③にはどちらも描かれていない[2-(5)-③部分3]。また寺内に見える僧侶は、①・②では白衣だが、③は黒衣である。



2-(5)-②部分5 a 護国寺



2-(6)-①部分1



2-(6)-①部分2

(6) 湯原・泊村・安里

湯原・泊村・安里(①・②はさらに首里も)を描く屏風右手には、日常生活の要素が多数確認できる。



2-(6)-②



2-(6)-②部分1



2-(6)-②部分2



2-(6)-③部分1



2-(6)-③部分2



2-(6)-③

泊村から泊高橋を経て湯原に至る途中の徒渡しでは、①では傘を差して渡る男性と、子供(?)を籠に入れて運搬する男性が[2-(6)-①部分1]、②では傘を差す男性の代わりに子供を背負う男性が描か



2-(6)-①部分 3



2-(6)-②部分 3



2-(6)-③部分 3



首里城龍樋

れ [2-(6)-②部分 1]、③にはその全てが描かれている [2-(6)-③部分 1]。なお村内の漂着民収容所に関しては 1-(4) で扱ったのでここでは触れない。

製塩作業が行われている湧原では、①のみ水撒きの男性が描かれていない。駕籠に乗った琉球高官の行列の描写は、①～③ともほぼ同様であるが、②のみ 2 か所に行列が描かれている。また③の行列末尾で行李を背負う男性は、3 図の中では最も深く腰を曲げ苦しそうな様子である。①～③とも崇元寺横の広場で将棋に興じる人々の中に、クパ扇を持つ男性がいる。また①・③には将棋盤の罫線が見える。

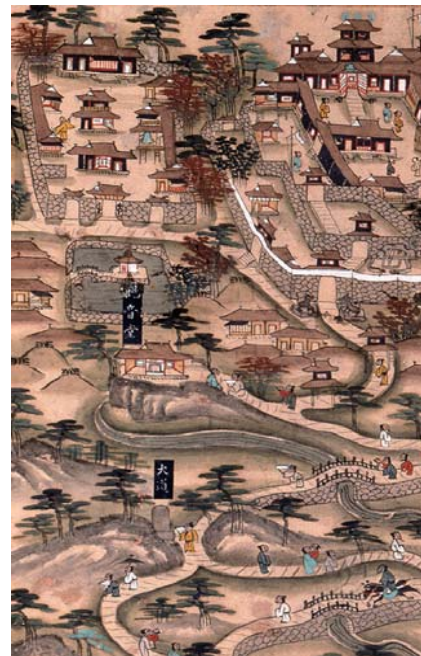
(7) 首里

③では首里は割愛されているため、ここでは①・②のみを比較する。

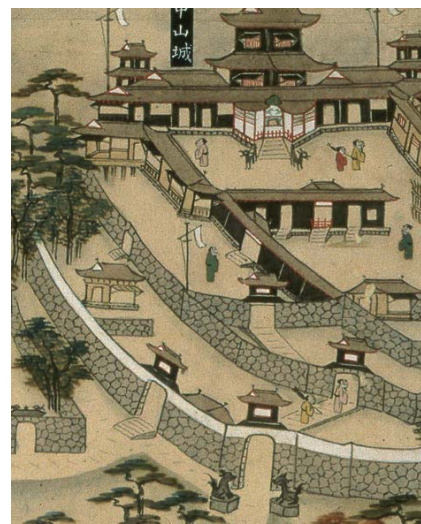
安里から首里城へ至る坂道には、②のみ荷を運ぶ馬が描かれている [2-(7)-②部分 4]。①には描かれている観音堂の円鑑池は、②には見えない。円覚寺の総門は、①では単層構造で左右に仁王像が配置



2-(7)-①部分 1 (首里城)



2-(7)-①



2-(7)-②部分 1 (首里城)



2-(7)-②



2-(7)-②部分 4



2-(7)-①部分 2 (円覚寺)



円覚寺総門



円覚寺僧侶



2-(7)-①部分 3 (観音堂)



2-(7)-②部分 2 (円覚寺)



円覚寺総門



円覚寺僧侶



2-(7)-②部分 3 (観音堂)

されているが、②では上下2層で仁王像はない(実態を反映しているのは①である)。また①の鐘楼には青銅色の梵鐘が描かれている。境内に見える僧侶は、①が黄衣、②が黒衣で、帚を手に境内を掃いている。②には塵の舞い上がる様子まで描かれている。

首里城正殿の龍柱(正面欄干の左右)や、歓会門のシーサー(石獅子)は①の方がより粗雑に描かれている印象を受ける。だが、①に描かれた龍樋は、②には描かれていない。先述した円覚寺総門の様子や円鑑池の有無なども鑑みると、①の方が全体的により事実や実態を反映している傾向があるように思われる。⁽¹³⁾

以上、簡単にではあるが①～③を比較した。強い類似性が見られる3図であるが、すでに述べてきたように細部には異なる点が多々存在する。恐らく何らかのベースとなる図を参照しながら、制作者(絵師)が、自らの感性や生活文化、自身が把握している事実・実態を反映させて描いたのであろう。その意味では、ベースとなる図の上に投影された「ある時点における(1人ないしは複数の)絵師自身の那覇・首里イメージ」の差異こそが、各屏風の細かな相違点を生み出しているものと考えられる。

3.「琉球交易港図屏風」の生活絵引編纂

生活絵引は、人々の日常生活を図像資料から引き出して、特定の過去を知る手がかりとするユニークな事典編纂の方法であり[福田2007]、その前身である『絵巻物による日本常民生活絵引』[渋沢1965-1968]から発展的に継承された。

その編纂に関わる非常に重要な特色は、事物相互の関連・関係性を重視し、これらを理解できるように、図像を完全に個別事物に分解せず、ある程度の広がりの中で場面を切り取る方法を採用しているという点である[福田2007]。

「琉球交易港図屏風」は、この絵引編纂の特色に新たな展開をもたらす可能性を有している。それは

類図の存在による。⁽¹⁴⁾「琉球交易港図屏風」には、構図・モチーフともに極めて共通性の高い、しかし細部は様々な点で異なっている類図が現在他に5点確認されている。それらは単なる写本の類ではなく、恐らくは絵図の描かれた時代・場所において実際に生活していた絵師が、共通性の高い構図・モチーフを用いながらも、自らの感覚や知見を多角的に反映させて制作したと考えられる類図である。

本稿ではそのなかでも特に強い類似性を有する「琉球貿易図屏風」(②)・「琉球進貢船図屏風」(③)を用いて、「琉球交易港図屏風」(①)との比較分析を行った。これにより、まず描かれた内容を相対化することが可能になった。例えば3図の中では①のみが、かなりおごりな筆運びながらも、那覇波上(現・那覇市若狭)の護国寺に仁王像と梵鐘を描いている[2-(5)-①部分4]。②は梵鐘のみ、③は双方とも描かれていないことから[同②部分5、③部分3]、相対的に見て護国寺に関して①にはより実態が反映されていることがわかる。首里の円覚寺や首里城の描写においても、類図との比較によって同様の傾向が確認できる。

類図との比較分析はまた、従来の絵引のように絵図上の点(事物・行為)を組み合わせた場面として空間を把握することに加え、複数の場面からなる層として、より立体的に空間を捉えることも可能にした。それは描かれた空間の「日常生活における(ある程度の時間幅を伴う)状態」を、より実態に即して理解することに繋がっている。

例えば①～③の屏風が制作されたある一定の期間、泊村の外国人漂着民の収容地の「日常生活における状態」は、漂着民の有無に応じて「仮小屋が建った状態」(相対的に短い期間)と「空き地の状態」(相対的に長い期間)を繰り返すというものだったのであろう。この2つの状態の有無からなる「日常生活の状態」は、3図の同地点を並べて見ることで初めて視覚的に捉えることができるのである[1-(4)-①～③]。

本稿では①～③のみを比較したが、残る類図(④

～⑥)も加えて比較を重ねれば、より豊かな相対化の視点——それは資料批判の目でもある——を獲得し、「特定の過去の日常生活の実態」に、さらに接近することができるであろう。また①～⑥以外にも、屏風の一部分を切り出してきたかのような風俗画が存在しており、今後新たな屏風が発見される可能性も含めると、類図の比較分析の奥行きは一層広がっていくものと考えられる。

このように生活絵引に、相対化と立体化という選択肢を示した「琉球交易港図屏風」とその類図であるが、一方で検討すべき課題も残されている。その最たるものが、屏風に描かれていない実態の検討で

あろう。例えば、那覇に確実に存在する幾つかの大規模な墓地はどの屏風にも描かれていない。一連の屏風には、琉球人が外部(恐らくは日本^{ヤマト})に対して「見せたい事物・行為」が描かれているのであり、この目的に沿わない実態の一部が、明確な意図のもとに「削除」ないしは「デフォルメ(変形・強調)」されている可能性が高い。一体何がなぜ描かれていないのか——この問題が十分に検討された時に初めて「琉球交易港図屏風」は生活史のインデックスとしての真価を獲得・発揮し得るであろう。なおこの課題に取り組む上でも、類図との比較分析が有効であるように思われる。

【注】

- (1) 琉球には、中国福建画壇の影響を受け、さらに琉球独特の細部の表現に独自性を加えていった「觀賞用絵画」、表現に中国的絵画技術を応用した歴代国王の肖像画である「御後絵」、大和狩野派の表現の影響を受け、琉球の文化や生活を画いた「風俗画」の3つの領域があると言われており、「琉球交易港図屏風」は風俗画として分類されている[加藤2007]。
- (2) [沖縄大百科事典刊行事務局1983(下):P.73]の図Ⅱをもとに作成した。
- (3) ①・②に関しては[岩崎2001a]も、絵の構図から細部の描き方で酷似していることから、同じ工房で描かれた可能性を指摘している。
- (4) 板井英伸氏によれば、これは謝敷真起子氏・小野まさ子氏の指摘である[板井2008]。両名は一連の屏風に関する研究会を行い、これらを「読む」作業を蓄積しているが、まだそのまとまった成果は刊行されていないという[同前]。
- (5) 股元良の描いた那覇俯瞰図の模写(1833年)が、西尾市の岩瀬文庫に所蔵されている。その写真画像は[那覇市歴史博物館2011:P.3]に掲載されている。
- (6) 原本は焼失し、モノクロの写真画像のみが残っている[鎌倉1982(写真編):P.239-281]。
- (7) なお鎌倉芳太郎は呉著仁を首里城・那覇港の鳥瞰図の創始者と位置づけている[鎌倉1982(本文編):P.206]。また同じく呉著仁を一連の屏風の構図の始祖と見る安里進は、18世紀を通じて首里王府が推進した国土の測量と地図製作事業が、首里城と那覇港を鳥瞰する絵画様式を生み出し展開させていく下地を作ったとする[安里2000・2009]。
- (8) 豊見山和行氏の御教示による。
- (9) 残念ながら総合的な調査は行われておらず、従ってまとまったリストも作成されていない。
- (10) 豊見山和行氏の御教示による。
- (11) 田名真之氏の御教示による。
- (12) ②を分析した佐々木利和氏は、子供を背負っているのは圧倒的に「父親」で、子供を抱く形態はすべて「母親」だと指摘している[佐々木1998]。
- (13) 護国寺の仁王像や泊村の漂着民収容所の記載なども実態反映の例として付け加えることができるだろう。
- (14) 得能壽美氏の御教示による。
- (15) 例えば「爬竜船競漕及び帰唐船の図」(軸装、首里城公園蔵)の画風は①～③に酷似している[首里城公園管理部2012:P.20]。

〔付記〕本稿を作成するにあたり、本書の執筆者の方々に加え、以下の機関・個人のご協力・ご教示をいただいた。特に記して、心より深謝申し上げたい。

浦添市美術館・京都大学総合博物館・滋賀大学経済学部附属史料館・首里城公園管理センター・青柳周一氏・岩崎奈緒子氏・上江洲安亨氏・平川信幸氏・山田徹氏

【参考文献】

- *各文献が主な分析対象とする、または写真画像を掲載する屏風の番号(P.145-146)をカッコ内に記した。
- 安里進 2000『琉球王国と琉球貿易図屏風』『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』33(②)
- 安里進 2009「首里城那覇港鳥瞰図の系譜」上間常道ほか編『琉球絵画展—琉球王朝から近代までの絵画—』沖縄文化の杜
- 板井英伸 2008『『那覇港図屏風』にみる19世紀那覇港の船』『比較民族研究』22(①～⑥)
- 岩崎奈緒子 2001a「『琉球貿易図屏風』の成立について—下貼文書の検討から—」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』34(②)
- 岩崎奈緒子 2001b『琉球貿易図屏風』滋賀大学経済学部附属史料館(②)
- 大熊良一 1971『異国船琉球来航史の研究』鹿島出版会
- 沖縄県教育庁文化課編 1978『沖縄県文化財調査報告書11 県内絵画遺品調査報告書』沖縄県教育委員会(⑤・⑥)
- 沖縄大百科事典刊行事務局編 1983『沖縄大百科事典』上・中・下 沖縄タイムス社
- 沖縄美術全集刊行委員会編 1989『沖縄美術全集』4(絵画・書) 沖縄タイムス社(⑤・⑥)
- 加藤健二 2007『琉球絵画「琉球進貢船図屏風」に描かれた内容の分析と考察—当時の那覇の生活文化を探る—』『武蔵野美術大学研究紀要』(38)(②・③)
- 鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝』2分冊(本文編・写真編) 岩波書店
- 紙屋敦之 1990『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房
- 九州国立博物館編 2006『開館記念特別展 うるまじゅり島 琉球』同館(①～③、④・⑤)
- 佐々木利和編 1998『民族誌資料としての琉球風俗画の基礎的研究』東京国立博物館(平成七～九年度日本学術振興会科学研究費基盤(B)研究成果報告書)(②)
- 渋谷敬三編著 1965-1968『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店
- 謝敷真起子 1998a「琉球交易港図考」①『きよらさ』18 浦添市美術館(①)
- 謝敷真起子 1998b「琉球交易港図考」②『きよらさ』19 浦添市美術館(①)
- 謝敷真起子 1999「琉球交易港図考」③『きよらさ』23 浦添市美術館(①)
- 謝敷真起子 2000a「琉球交易港図考」④『きよらさ』25 浦添市美術館(①)
- 謝敷真起子 2000b「琉球交易港図考」⑤『きよらさ』26 浦添市美術館(①)
- 首里城公園管理センター編 2002『琉球王朝の華—美・技・芸—(首里城公園開園10周年記念企画展)』海洋博覧会記念公園管理財団(⑥)
- 首里城公園管理部編 2012『首里城に魂を!—国内唯一の赤い城二十年のストーリー—(首里城公園開園20周年記念特別展)』海洋博覧会記念公園管理財団(⑥)
- 関地久治・庄野雅彦 1998「紙本著色「琉球交易港図」修復報告」『浦添市美術館紀要』7(④)
- 豊見山和行 2004a「モノと図像が語る琉球史(上)」『沖縄タイムス』1月5日(②)
- 豊見山和行 2004b「モノと図像が語る琉球史(下)」『沖縄タイムス』1月12日(②)
- 豊見山和行 2012「船と琉球史—近世の琉球船をめぐる諸相—」岡本弘道編『船の文化からみた東アジア諸国の位相—近世期の琉球を中心とした地域間比較を通じて』関西大学文化交渉学教育研究拠点(②)
- 那覇市歴史博物館編 2011『那覇の誕生祭—浮島から那覇へ—』同館(②・③・⑤・⑥)
- 福田アジオ 2007『生活絵引編纂の世界的意義』神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告4/第2回国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 堀川彰子 2008「一九世紀以前の那覇を描いた俯瞰的絵図の基礎研究—年代・構図・系譜—」『史林』91-3
- 有限会社文化財保存 2001「『琉球貿易図屏風』六曲一隻 保存修理報告書」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』34(②)
- 渡辺美季 2003「近世琉球における外国人漂着民収容センターとしての泊村」沖縄研究国際シンポジウム事務局編『第四回「沖縄研究国際シンポジウム」ヨーロッパ大会 世界に拓く沖縄研究』

参考文献目録

本書の絵引作成および解説文章の執筆に際して参考とした文献・新聞記事を、著者名の五十音順に配列した。同一著者の文献は、発行年次順とした。著者・編者と発行所が同じ場合は、発行所の記載を省略した。

安里進 2000 「琉球王国と琉球貿易図屏風」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』33
安里進 2009 「首里城那覇港鳥瞰図の系譜」上間常道ほか編 [上間常道 2009]
網野善彦・石井進編 1995 『東シナ海を囲む中世社会』新人物往来社
石井謙治 1995 『ものと人間の文化史 76- I 和船 I』法政大学出版局
石垣市総務部市史編集室編 1991 『石垣市史叢書』1 石垣市役所
石垣市総務部市史編集室編 1992 『石垣市史叢書』2 石垣市役所
石垣市総務部市史編集室編 1994 『石垣市史叢書』7 石垣市役所
石垣市総務部市史編集室編 1994 『石垣市史 各論編 民俗 上』石垣市役所
石垣市立八重山博物館編 1985 『八重山蔵元絵師画稿集』（カラー複製版）
石垣市立八重山博物館編 1993 『八重山蔵元絵師画稿集』
板井英伸 2008 「『那覇港図屏風』にみる 19 世紀那覇港の船」『比較民俗研究』22
岩崎奈緒子 2001a 「『琉球貿易図屏風』の成立について— 一下貼文書の検討から—」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』34
岩崎奈緒子 2001b 「琉球貿易図屏風」滋賀大学経済学部附属史料館（同館パンフレット）
上江洲均 1973 『沖縄の民具』慶友社
上江洲均 1982 『沖縄の暮らしと民具』慶友社
上江洲均 2005 『沖縄の民具と生活』榕樹書林
上間常道編 2009 『琉球絵画展 琉球王朝から近代までの絵画』沖縄文化の杜（図録）
臼井洋輔 2001 『バタン漂流記 神力丸巴丹漂流記を追って』叢文社
浦添市美術館編 2010 『北斎の描いた琉球 琉球八景』（図録）
恵原義盛 1973 『奄美生活誌』木耳社
大熊良一 1971 『異国船琉球来航史の研究』鹿島研究所出版会
大浜憲二 1996 「八重山農耕図」『日本農書全集 71 絵農書 1』農山漁村文化協会
沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部海洋博覧会記念公園調整官室編 1986 『首里城関係写真資料集』
沖縄県教育庁文化課編 1978 『沖縄県文化財調査報告書 11 県内絵画遺品調査報告書』沖縄県教育委員会
沖縄県立博物館・美術館編 2010 『海のクロスロード八重山』（図録）
沖縄大百科事典刊行事務局編 1983 『沖縄大百科事典』上・中・下 沖縄タイムス社
沖縄美術全集刊行委員会編 1989 『沖縄美術全集』4（絵画・書） 沖縄タイムス社
海洋博覧会記念公園管理財団編 1993 『首里城 琉球王府』ぎょうせい
鹿児島民具学会編 1991 『鹿児島民具博物誌 かのしまの民具』慶友社
加藤健二 2007 「琉球絵画『琉球進貢船図屏風』に描かれた内容の分析と考察— 当時の那覇の生活文化を探る」『武蔵野美術大学研究紀要』38
角川日本地名大辞典編纂委員会編 1986 『角川日本地名大辞典』47（沖縄県） 角川書店
鎌倉芳太郎 1982 『沖縄文化の遺宝』2 分冊（本文編・写真編） 岩波書店
紙屋敦之 1990 『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房
川野和昭 2006 「『琉球寫真景』にみる奄美の民俗文化— 『大嶋古図』・『南島雑話』・東南アジア大陸

北部少数民族の民俗文化との比較から | 『黎明館調査研究報告』19

菊池義顕 2003 『浦内沿革史』(1951 年刊の再録)『大和村誌資料集 1 大和村の近現代』大和村

喜舎場永珣 1975 『(新訂増補) 八重山歴史』国書刊行会

喜舎場永珣 1977 「蔵元政庁の絵師」『八重山民俗誌 下巻』沖縄タイムス社

九州国立博物館編 2006 『開館記念特別展 うるまちゅら島 琉球』(図録)

球陽研究会編 1974 『球陽』原文編・読み下し編 角川書店

国立国語研究所編 1998 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

小林茂 2005 「疫病にみる近世琉球列島」[財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室 2005]

財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2005 『沖縄県史 各論編』4 (近世) 沖縄県教育委員会

佐々木利和 1998 『民族誌資料としての琉球風俗画の基礎的研究』東京国立博物館 (平成七～九年度 日本学術振興会科学研究費基盤 (B) 研究成果報告書)

里井洋一 2011 「蔵元絵師画稿集・異人の図を読み解く―漂着マニラ人か―」レジュメ、琉球大学附属図書館開催特別講演会「八重山の歴史をさぐる」(2011 年 10 月 23 日) 石垣市立図書館

渋谷敬三編著 1965-1968 『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店

島袋全発 1978 『那覇変遷記―解題・船越義彰』沖縄タイムス社

下原美保 2003 「『琉球寫真景』考」『近世薩摩における大名文化の総合的研究』鹿児島大学教育学部国語研究室 (平成一三～一四年度日本学術振興会科学研究費基盤 (A) 研究成果報告書)

謝敷真起子 1998a 「琉球交易港図考」①『美術館ニュース きよらさ』18 (浦添市美術館)

謝敷真起子 1998b 「琉球交易港図考」②『美術館ニュース きよらさ』19 (浦添市美術館)

謝敷真起子 1999 「琉球交易港図考」③『美術館ニュース きよらさ』23 (浦添市美術館)

謝敷真起子 2000a 「琉球交易港図考」④『美術館ニュース きよらさ』25 (浦添市美術館)

謝敷真起子 2000b 「琉球交易港図考」⑤『美術館ニュース きよらさ』26 (浦添市美術館)

周煌 (原田禹雄訳注) 2003 『琉球国志略』榕樹書林

首里王府 (原田禹雄訳注) 2005 『琉球国旧記―訳注』榕樹書林

首里王府 (諸見友重翻訳) 2011 『中山世鑑―訳注』榕樹書林

首里城研究グループ編 1997 『首里城入門 その建築と歴史』ひるぎ社

首里城公園管理センター編 2002 『琉球王朝の華―美・技・芸― (首里城公園開園 10 周年記念企画展)』海洋博覧会記念公園管理財団 (図録)

首里城公園管理部編 2012 『首里城に魂を! ―国内唯一の赤い城二十年のストーリー― (首里城公園開園 20 周年記念特別展)』海洋博覧会記念公園管理財団 (図録)

徐葆光 (原田禹雄訳注) 1999 『中山伝信録』榕樹書林

新城敏男 2013 「近世八重山士族の異国語習得」『年報月曜ゼミナール』5

申叔舟 (田中健夫訳) 1991 『海東諸国紀―朝鮮人の見た中世の日本と琉球』(岩波文庫 青 458-1) 岩波書店

関地久治・庄野雅彦 1998 「紙本著色『琉球交易港図』修復報告」『浦添市美術館紀要』7

専売局 (大蔵省) 編 1907 『大日本塩業全書』第二編

高橋誠一 2003 『琉球の都市と村落』関西大学東西学術研究所

田名真之 1984 『南島地名考―おもろから沖縄市誕生まで』ひるぎ社

津波高志 2002a 「琉球寫真景の文化的描写 1」『南海日日新聞』9 月 30 日

津波高志 2002b 「琉球寫真景の文化的描写 2」『南海日日新聞』10 月 3 日

津波高志 2002c 「琉球寫真景の文化的描写 3」『南海日日新聞』10 月 7 日

津波高志 2002d 「琉球寫真景の文化的描写 4」『南海日日新聞』10 月 10 日

津波高志 2002e 「琉球寫真景の文化的描写 5」『南海日日新聞』10 月 14 日

津波高志 2002f 「琉球寫真景の文化的描写 6」『南海日日新聞』10 月 17 日

津波高志 2012 『沖縄側から見た奄美の文化変容』第一書房

坪井清足・吉田靖・平井聖監修 1992 『復元体系 日本の城 8 九州・沖縄』ぎょうせい

得能壽美 2001 「近代八重山の祝祭日―明治三六年新税実施記念祝賀会を中心に―」『南島史学』57・58

得能壽美 2003 「『蔵元絵師画稿集』にみる人頭税時代」[八重山人頭税廃止百年記念事業期成会記念誌部会 2003]

得能壽美 2004a 「文字化されない生活場面／モノと図像が語る琉球史 (上)」『沖縄タイムス』3 月 8 日

得能壽美 2004b 「文字化されない生活場面／モノと図像が語る琉球史 (下)」『沖縄タイムス』3 月 15 日

得能壽美 2005 「近世琉球における身分制度の地方的展開―八重山を事例に―」[財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室 2005]

得能壽美 2007a 『近世八重山の民衆生活史―石西珊瑚をめぐると海と島々のネットワーク』榕樹書林

得能壽美 2007b 「史料にみる八重山の疾病」石垣市編集委員会編『石垣市史 各論編 民俗下』石垣市

得能壽美 2008 「〈字誌資料〉史料が語る大川村の近世史」大川字会

得能壽美 2012 「研究調査報告『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究 八重山蔵元絵師画稿」『ニューズレター 非文字資料研究』28

得能壽美 2014a 「八重山の通詞―学習と任務―」公益財団法人久米国鼎会発行予定

得能壽美 2014b 「琉球・八重山における猪対策―近世における文書の公的世界と絵画の私的世界―」『年報 非文字資料研究』10 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター

所崎平 1968 「藩政期の糖業技術発達の概観」名瀬市誌編纂委員会『名瀬市誌 上巻』

豊見山和行 2004a 「『琉球貿易図屏風』を読む (上)」『沖縄タイムス』1 月 5 日

豊見山和行 2004b 「『琉球貿易図屏風』を読む (下)」『沖縄タイムス』1 月 12 日

豊見山和行 2012 「船と琉球史―近世の琉球船をめぐると諸相―」『関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS)』5

http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/5971/1/1-1_TOMIYAMA%20Kazuyuki.pdf

名嘉真宜勝 1999 『沖縄の人生儀礼と墓』沖縄文化社

名越左源太 (国分直一・恵良宏校注) 1984 『南島雑話』1・2 (東洋文庫 431) 平凡社

名護博物館編 1990 『特別展 絵巻『琉球寫真景』』(図録)

名瀬市誌編纂委員会編 1996 『名瀬市誌』下 (民俗編)

那覇市企画部市史編集室編 2004 『那覇市史』資料編第 1 巻 12 那覇市役所

那覇市歴史博物館編 2011 『那覇の誕生祭―浮島から那覇へ―』(図録)

日本塩業大系編集委員会編 1977 『日本塩業大系』特論・民俗 日本専売公社

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 2000-2002 『日本国語大辞典』第二版 小学館

昇曙夢 2009 『復刻 奄美史』南方新社

林蘇喜男 2002 「伊津部仮屋について」『林蘇喜男雑纂』5

東恩納寛淳 1950 『南島風土記 (沖縄・奄美大島地名辞典)』沖縄文化協会

東恩納寛淳 1978 「童景集」琉球新報社編『東恩納寛淳全集』5 第一書房

比嘉武則 2002 「『琉球寫真景』ふたたび」『名護博物館紀要 あじまあ』10

福田アジオ 2007 「生活絵引編纂の世界的意義」『神奈川大学 21 世紀 COE プログラム シンポジウム報告 4 / 第 2 回国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

外間守善・波照間永吉編著 1997 『定本 琉球国由来記』角川書店

堀川彰子 2008 「一九世紀以前的那覇を描いた俯瞰的絵図の基礎研究—年代・構図・系譜—」『史林』91-3

真栄平房昭 2001 「琉球王国・那覇港の風景」佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6 都市社会史』山川出版社

真栄平房昭 2006 「琉球王国の港と船」山本博文監修『ビジュアル NIPPON 江戸時代』小学館

松下志朗 1983 『近世奄美の支配と社会』第一書房

松下志朗・下野敏見編 2002 『鹿児島の湊と薩南諸島』吉川弘文館

三木健 1992 『八重山近代史の諸相』文嶺社

源武雄 1972 『日本の民俗 (47) 沖縄』第一法規出版

宮城文 1982 『八重山生活誌』沖縄タイムス社

宮本常一 1970 『私の日本地図8 沖縄』同友館

宮良当壮 1980 「八重山語彙」甲編『宮良当壮全集』8の1 第一書房

宮良当壮 1981 「八重山語彙」乙編『宮良当壮全集』8の2 第一書房

八重山人頭税廃止百年記念事業期成会編 2002 『八重山 人頭税廃止百年記念展』(図録)

八重山人頭税廃止百年記念事業期成会記念誌部会編 2003 『あさばな 八重山人頭税廃止百年記念事業期成会記録』南山舎

有限会社文化財保存 2001 「『琉球貿易図屏風』六曲一隻 保存修理報告書」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』34

弓削政己 2000a 「『琉球寫真景』の世界 (1)」『南海日日新聞』12月18日

弓削政己 2000b 「『琉球寫真景』の世界 (2)」『南海日日新聞』12月19日

弓削政己 2000c 「『琉球寫真景』の世界 (3)」『南海日日新聞』12月20日

弓削政己 2000d 「『琉球寫真景』の世界 (4)」『南海日日新聞』12月22日

弓削政己 2000e 「『琉球寫真景』の世界 (5)」『南海日日新聞』12月23日

弓削政己 2000f 「『琉球寫真景』の世界 (6)」『南海日日新聞』12月24日

弓削政己 2000g 「『琉球寫真景』の世界 (7)」『南海日日新聞』12月25日

弓削政己 2000h 「『琉球寫真景』の世界 (8)」『南海日日新聞』12月27日

弓削政己 2000i 「『琉球寫真景』の世界 (9)」『南海日日新聞』12月28日

弓削政己 2000j 「『琉球寫真景』の世界 (10)」『南海日日新聞』12月29日

弓削政己 2000k 「芭蕉と城内交易」喜界町誌編纂委員会編『喜界町誌』喜界町

弓削政己・岩多雅朗・飯田卓・中山清美 2012 『名瀬のまち いまむかし』南方新社

与那原恵 2013 『首里城への坂道—鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像—』筑摩書房

ラブ・オーシュリ・上原正稔編著(照屋善彦監修、上原正稔訳) 1987 『青い目が見た「大琉球」』ニライ社

渡辺美季 2003 「近世琉球における外国人漂着民収容センターとしての泊村」沖縄研究国際シンポジウム事務局編『第四回「沖縄研究国際シンポジウム」ヨーロッパ大会 世界に拓く沖縄研究』同会

渡辺美季 2005 「漂流・漂着と近世琉球」[財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室 2005]

渡辺美季 2012 『近世琉球と中日関係』吉川弘文館

索引

- 1 図版に付けた事物・行為についての語句キャプションを五十音順に配列した。
2 章番号-図番号-キャプション番号の形式で、掲載ページ順に記載した。

あ

藍染 …………… Ⅲ-49 (2)-12

赤毛 …………… Ⅱ-34-6

赤崎〈地名〉…………… Ⅲ-50-5

あかつら〈地名〉アカチラ …………… Ⅰ-13-15

赤鉢巻…………… Ⅰ-8-10、10-26

赤覆面…………… Ⅰ-5-20、10-29

赤禪 …………… Ⅰ-2-10、7-4、10-14、12-10

あぐらをかく ダシキィビィリィ …… Ⅱ-18-13、20-14

顎鬚 シタビィニ …… Ⅱ-19-27、21-10、18-17、20-8、37-3

安里橋(崇元寺橋) …………… Ⅰ-15-10

網代? …………… Ⅱ-27-3

畦道…………… Ⅲ-48 (1)-9

天久宮 …………… Ⅰ-16-12

合わせ(直線の合わせ)…………… Ⅱ-38-7、39-5

行燈 …………… Ⅱ-36-15

硫黄城 ユーワグスク …………… Ⅰ-11-1

池 …………… Ⅲ-40 (2)-27、45 (1)-4

泉崎橋 イジュンザチバシ …………… Ⅰ-14-31

板付船 イタツケ…………… Ⅲ-41 (2)-5

板橋 …………… Ⅲ-48 (1)-5

伊津部〈地名〉…………… Ⅲ-40 (1)-9

伊津部湊 …………… Ⅲ-40 (1)-2

糸? …………… Ⅱ-29-14

糸車 ヤマ …………… Ⅱ-28-11、29-6

糸巻き? …………… Ⅱ-39-8

稲束 マイタバル …………… Ⅱ-22-1、23-4

稲叢の土台 シラヌフンダー …………… Ⅱ-24-16

稲叢を作る …………… Ⅱ-24-17

稲を運ぶ(牛) …………… Ⅱ-23-1

稲を運ぶ(馬) …………… Ⅱ-23-11

稲を運ぶ(人) …………… Ⅱ-23-14

位牌 ガーナーイフェー …………… Ⅱ-31-13

位牌 唐イフェー …………… Ⅱ-31-1

イビの前 …………… Ⅰ-3-8

今里へ抜ける道 …………… Ⅲ-47 (1)-6

右胸門 …………… Ⅰ-17-14

上の毛〈地名〉ウィーヌモウ …………… Ⅰ-13-13

浮道 …………… Ⅰ-17-3

字検〈地名〉…………… Ⅲ-47 (2)-8

字検仮屋 …………… Ⅲ-40 (2)-26

後鉢巻 …………… Ⅰ-14-8

白 …………… Ⅱ-32-15、36-10、Ⅲ-45 (2)-10

内側からたすき掛け(袖結) …………… Ⅱ-27-19

団扇 …………… Ⅰ-10-10、Ⅱ-19-20

落平 ウティンダ …………… Ⅰ-2-1

腕を組む …………… Ⅱ-39-3

大道(ウフドー) 松原 …………… Ⅰ-15-2

大道毛之碑文 ウフドーモ-のひもん …………… Ⅰ-15-3

馬 …………… Ⅲ-46 (1)-4

馬で駆ける …………… Ⅰ-15-5

馬の制御具(おもがい) オモゲ …… Ⅲ-46 (1)-5、44 (2)-7

馬の手綱を引く …………… Ⅱ-25-12

馬の耳(たてがみ?) …………… Ⅰ-14-6

上着 スディナ …………… Ⅱ-27-35

運搬用の煙草の葉 …………… Ⅱ-26-24

笑顔 …………… Ⅱ-39-12

枝 …………… Ⅱ-33-5

枝手久島〈地名〉…………… Ⅲ-47 (1)-3

円覚寺総門 …………… Ⅰ-17-28

円覚寺龍淵殿 …………… Ⅰ-17-22

円鑑池 …………… Ⅰ-17-30

塩田に撒いた砂を均す …………… Ⅰ-14-21

塩分が付着した砂を集める(集砂) …………… Ⅰ-14-22

扇 オンギィ …………… Ⅱ-30-5

扇 …………… Ⅲ-41 (2)-15

扇を持つ …………… Ⅰ-2-13、14-12

奥武山〈地名〉…………… Ⅰ-2-15

王府役人主従 …………… Ⅰ-14-26

大帯 ウフウビィ …………… Ⅱ-19-24、31-20

大型船 帰唐船 …………… Ⅰ-4-20

大型船 進貢船 …………… Ⅰ-5-3

大型船 接貢船 …………… Ⅰ-7-11

大型船 唐船(ト-シン) …………… Ⅰ-6-20

大型船 大和船 …………… Ⅰ-7-1

大型船を曳航する …………… Ⅰ-5-2

大きな岩の連なり …………… Ⅲ-48 (1)-6

大橋 …………… Ⅰ-10-18

大風呂敷 ……Ⅱ-30-2
おがみ山〈地名〉 ……Ⅲ-40(1)-10
小川 ……Ⅲ-48(1)-8
沖宮 ……Ⅰ-9-20
送り手 ……Ⅲ-45(2)-24
苧笛 スクイ ……Ⅱ-18-2、26-27、29-4
苧笛の蓋 ……Ⅱ-28-15
桶 ターグ ……Ⅰ-9-16、12-11、14-16
桶 ……Ⅱ-18-23、19-2、19-6、36-5
桶を腕に掛け腰で支えて運ぶ ……Ⅲ-48(2)-12
桶をかつぐ ……Ⅱ-18-25
箴 ……Ⅱ-28-5
おじぎをする ……Ⅲ-47(2)-18
御庭 ウナー ……Ⅰ-17-7
帯 ウビ ……Ⅱ-19-25、20-11、21-5、30-13
帯 ウビ ……Ⅲ-46(2)-26
帯（前結び） ウビ ……Ⅲ-42-11、48(2)-15
面木 ウムイ ……Ⅱ-22-9、23-13
表垣立 ……Ⅰ-7-8
御物城 ……Ⅰ-2-11
折り箱 ……Ⅱ-32-10

か

懼 ……Ⅰ-7-29
懼 ヤク ……Ⅱ-30-7
懼 ヨホ ……Ⅲ-46(2)-30
会所（学校）に行く ……Ⅱ-26-8
懼を漕ぐ ……Ⅰ-7-30、8-6
鏡餅 ……Ⅱ-31-4
垣花〈地名〉 ……Ⅰ-3-2
崖 ……Ⅲ-43-2
駕籠 ……Ⅰ-10-40
籠 ……Ⅰ-10-41、Ⅱ-27-22
駕籠かき ……Ⅰ-14-27
傘 ……Ⅰ-7-31
傘 サナ ……Ⅱ-19-15、26-7、30-9、36-17
傘持ち ……Ⅰ-14-28
笠利仮屋 ……Ⅲ-40(2)-37
傘をさす ……Ⅰ-2-19、14-11、15-4、Ⅱ-19-17
傘を持ち従う ……Ⅱ-19-26
菓子 ……Ⅱ-31-18
舵 ……Ⅰ-6-5、8-11
片肌を脱ぐ ……Ⅱ-19-5、23-17
徒渡り ……Ⅰ-16-19
かつぎ棒 ……Ⅱ-23-15、24-12
金久〈地名〉 ……Ⅲ-40(1)-13

金久湊 ……Ⅲ-40(1)-3
鉦 ハーリーガネ ……Ⅰ-8-3
鐘 ……Ⅰ-17-25
鉦 ションク ……Ⅱ-35-3
鉦を打つ ……Ⅰ-8-4
歌舞 ……Ⅰ-10-30
被り物 ……Ⅱ-18-8、19-1
被り物 赤冠 ……Ⅰ-8-7
被りもの ウックイ ……Ⅲ-46(2)-10
鎌 ガギィ ……Ⅱ-22-11、35-9
髪型（丸めて垂らす） ……Ⅱ-38-5
甕 ……Ⅱ-27-23
茅葺き カヤブチャー ……Ⅰ-14-24
唐破風 カラファーフ ……Ⅰ-17-2
仮小屋 ……Ⅲ-49(2)-24
乾いた糸？ ……Ⅱ-28-9
瓦葺き カーラヤー ……Ⅰ-14-25
飲会門 ……Ⅰ-17-16
簪 ……Ⅱ-18-12、19-16、26-1、27-7
簪 ギハ ……Ⅲ-41(2)-13、42-8、45(2)-17、46(2)-25、48(2)-13
簪（男）カサシィ・ウシザシィ ……Ⅱ-20-4、21-7
簪（女） ……Ⅱ-20-1、21-2
甘蔗 ……Ⅱ-31-15
観音堂 ……Ⅰ-17-33
木椀 ……Ⅰ-5-17
帰国旗「捧旨帰国」旗 ……Ⅰ-5-7
刻み煙草入れ ……Ⅱ-21-17
生地（緞子？） ……Ⅱ-37-5
煙管 ……Ⅰ-16-30
煙管 キシリィ ……Ⅱ-18-5、21-1、24-2、27-9、36-12、38-2
煙管入れ ……Ⅱ-18-14
杵 ……Ⅱ-36-10
君南風〈地名〉 チンペー ……Ⅰ-7-36
君南風遙拝所 ……Ⅰ-7-37
肝入 ……Ⅰ-12-8
着物 ……Ⅱ-20-3、20-6、21-4、21-8
着物（格子柄） ……Ⅲ-45(2)-16
着物を干す？ ……Ⅱ-29-9
木屋 クヤー ……Ⅱ-36-13
久慶門 ……Ⅰ-17-15
急須 ……Ⅱ-18-3
牛刀 ヤマガタナ ……Ⅱ-27-21
行司 ……Ⅲ-49(2)-5
競走馬 ウマスーブ／ウマズリー ……Ⅰ-14-2
居住棟 オモテ ……Ⅲ-40(2)-29

櫛 ……Ⅱ-38-6
久志〈地名〉 ……Ⅲ-47(1)-7
口髭 オービィニ ……Ⅱ-18-17、19-27、20-7、21-9
靴？ ……Ⅰ-16-28
靴 ……Ⅱ-24-9、27-17
クバ扇 ……Ⅰ-15-12、16-34
クバ笠 ……Ⅰ-2-9、7-28、14-17、Ⅱ-18-9、19-10、22-14、23-5、25-13、27-28
首飾り ……Ⅱ-39-11
首回りの飾り ……Ⅱ-34-7
鞍 フファ ……Ⅱ-22-6
倉木崎〈地名〉 ……Ⅲ-47(1)-4
鍬（一本歯） ……Ⅱ-19-11
鍬 カナバイ ……Ⅱ-34-3
鍬 トウゲ（唐鍬） ……Ⅲ-44(1)-5、46(2)-20
軍配扇 ……Ⅱ-33-3
迎恩亭（通堂屋） ……Ⅰ-10-32
迎恩亭の門 ……Ⅰ-10-33
警察官 ……Ⅱ-27-15
下駄 アシィザ ……Ⅱ-19-28、24-8、26-11、27-10
下駄 ……Ⅱ-36-3
下男 ……Ⅰ-12-9
見物する ……Ⅲ-41(2)-7
見物人 ……Ⅰ-5-18
耕作小屋 ターヅクヤー（田作家） ……Ⅱ-22-3
広福門 ……Ⅰ-17-10
香炉 ……Ⅱ-31-8
木陰に座り談笑する ……Ⅰ-17-21
護国寺 ナンミンスティラ ……Ⅰ-13-7
小皿 ……Ⅱ-32-3
五色旗 ……Ⅰ-4-8、6-14、7-15
腰巻 ……Ⅱ-28-7
子供 ……Ⅱ-39-10
子供を背負う ……Ⅰ-7-33、Ⅱ-25-1、26-3、45(2)-6
子供を抱く ……Ⅰ-2-14、6-19、7-32、14-10、17-20
小橋 ……Ⅰ-10-21
小鉢 ……Ⅱ-20-16
小浜〈地名〉 ……Ⅲ-40(2)-18
鼓舞する ……Ⅲ-41(2)-6
小舟 ……Ⅰ-10-11、11-7、Ⅲ-40(1)-5
小舟 スブネ ……Ⅲ-47(2)-16
小舟 ハーリーブネ（久米村） ……Ⅰ-8-1
小舟 ハーリーブネ（泊村） ……Ⅰ-8-15
小舟 ハーリーブネ（那覇） ……Ⅰ-8-16
小舟 サバニ ……Ⅰ-5-1、5-25、7-27、9-1
小舟 サバニ（刳り船） ……Ⅱ-27-26
小舟 サバニ（剥ぎ船） ……Ⅱ-27-29、30-8

小舟 伝間船 ……Ⅰ-5-11、9-5
子守り ……Ⅲ-48(2)-21
子守りをする ……Ⅱ-26-2
御紋旗 左巴御紋（ヒジャイグムン） ……Ⅰ-6-1
小屋 ……Ⅲ-48(1)-3

さ

サーベル ……Ⅱ-27-16
サイ ……Ⅱ-35-8
菜園 ……Ⅲ-40(2)-32
竿秤 ……Ⅱ-26-21
杯を差し出す ……Ⅰ-5-24
坏 サカシキ ……Ⅱ-20-9、21-14、32-1
杯 マンニキ ……Ⅱ-31-9
魚の尾と頭をくくる ……Ⅲ-46(2)-27
魚を釣る ……Ⅱ-27-34
坂道 蚊坂（ガジャンピラ） ……Ⅰ-3-1
さがり ……Ⅰ-7-2、10-8
崎原〈地名〉 ……Ⅰ-3-7
作小屋 ヤドリ ……Ⅲ-43-9
酒と煙草？ ……Ⅰ-10-38
酒を注ぐ ……Ⅰ-5-23
支え棒 カタボウ ……Ⅲ-46(2)-13
棧敷 ……Ⅱ-24-10、32-7
指し薬？ ソー（門） ……Ⅱ-36-4
砂州 ……Ⅲ-40(1)-6
佐大熊〈地名〉 ……Ⅲ-40(2)-17
サツマイモ トン、ハンス ……Ⅲ-46(2)-6
薩摩の御用船（弁才船） ……Ⅰ-10-9
薩摩藩士 ……Ⅱ-36-1
薩摩役人 ……Ⅰ-10-35、11-12、Ⅲ-41(2)-10
薩摩役人 唐物方役人 ……Ⅰ-5-14、9-4
サトウキビ刈り ……Ⅲ-44(2)-9
サトウキビの葉を落とす ……Ⅲ-44(2)-12
サトウキビ畑 ……Ⅲ-43-10
サトウキビを運搬する ……Ⅲ-44(2)-11
砂糖車 サーターグルマ ……Ⅲ-44(2)-14
砂糖小屋 サタヤドリ、サーターヤー ……Ⅲ-44(1)-3
砂糖場 ……Ⅲ-44(2)-13
実久仮屋 ……Ⅲ-40(2)-25
狭間 ……Ⅰ-3-10
さら ……Ⅰ-14-15
筥（食べ物入り） ……Ⅰ-5-29
三角旗 ……Ⅰ-4-9、4-10、6-11、6-12、7-19、7-21、8-9
三角旗の竿 唐竹竿 ……Ⅰ-5-6
ザンギリ ……Ⅱ-27-4

三線 サンシン ……………Ⅰ-5-21、10-27
三線を弾く ……………Ⅰ-5-22
三方に白飯 ……………Ⅱ-31-14
三方に甘蔗 ……………Ⅱ-31-15
三方に餅 ……………Ⅱ-31-17
三方に菓子 ……………Ⅱ-31-18
山門 ……………Ⅰ-17-27
思案橋 ……………Ⅰ-11-8
潮の崎〈地名〉 スーヌサチ ……………Ⅰ-12-14
塩袋 ……………Ⅲ-49(2)-17
獅子 シーシィ ……………Ⅱ-35-10
獅子窟 ……………Ⅰ-17-26
獅子の石像 シーサー ……………Ⅰ-17-17
士族間で挨拶する ……………Ⅱ-19-29
下鞍 ……………Ⅰ-14-4
下之御庭 ……………Ⅰ-17-9
志戸勘への道 ……………Ⅲ-43-12
死牛 ……………Ⅱ-27-20
士の家(瓦葺き) ……………Ⅰ-16-9
柴の束を担う ……………Ⅱ-27-1
銃眼 ……………Ⅰ-9-19
重箱 ズブグ ……………Ⅱ-31-12
重箱 ……………Ⅲ-41(2)-9、49(2)-8
酒器 チューカー ……………Ⅰ-13-10
シュバマピラ〈地名〉 ……………Ⅲ-40(2)-21
首里森御嶽 シュリムイウタキ ……………Ⅰ-17-5
守礼門 ……………Ⅰ-17-18
象棋(中国将棋) チュンジー ……………Ⅰ-15-13
焼酎を飲む ……………Ⅲ-45(2)-5
焼酎を振る舞う ……………Ⅲ-45(2)-22
常緑の葉? ……………Ⅱ-31-3
鐘楼 ……………Ⅰ-17-24
食事をしている? ……………Ⅱ-39-13
燭台 ……………Ⅱ-31-11
織機(地機) ……………Ⅱ-28-1
しりがい ……………Ⅰ-14-5、Ⅱ-22-10、23-12
白鉢巻 ……………Ⅰ-8-8
白禪 ……………Ⅰ-2-12、9-11、11-14、Ⅲ-44(1)-6
白飯 ……………Ⅱ-31-14
陣笠 ……………Ⅰ-8-17
新川 ……………Ⅲ-40(1)-7
新川河口 ……………Ⅲ-40(1)-4
新濬那覇江碑 ……………Ⅰ-11-11
清服①(長袖・長ズボン・袖なし上着) ……………Ⅰ-16-26
清服②(長袖上着・長ズボン) ……………Ⅰ-16-29
清服③(巻頭衣) ……………Ⅰ-16-33
炊事棟 トーグラ ……………Ⅲ-40(2)-30

水車 ……………Ⅲ-44(1)-1
瑞泉門 ……………Ⅰ-17-12
水田 ……………Ⅲ-40(2)-34、43-8
水田(湿田) ……………Ⅲ-48(1)-7
末吉宮拝殿 ……………Ⅰ-16-2
末吉宮本殿 ……………Ⅰ-16-1
頭巾 ……………Ⅱ-35-2
頭上運搬する ……………Ⅱ-24-11、26-20、30-1、36-18
砂に筋目を入れて乾燥を促す(爬砂) ……………Ⅰ-14-23
ズボン? ……………Ⅱ-32-6
ズボン ……………Ⅰ-5-33
住吉宮 ……………Ⅰ-3-4
住吉の松林 ……………Ⅰ-2-18
スリット ……………Ⅱ-38-4
座って舟を漕ぐ ……………Ⅰ-2-8
背あて ウンジョウ ……………Ⅲ-44(2)-15、46(2)-15
聖現寺 ……………Ⅰ-16-10
正殿 ……………Ⅰ-17-1
肩負い運搬 ワッケリ ……………Ⅲ-46(2)-18
背負い紐 ティルノオ ……………Ⅲ-42-9、46(2)-16
背筋を伸ばして歩く ……………Ⅱ-18-11
接貢旗 ……………Ⅰ-7-18
瀬名仮屋 ……………Ⅲ-40(2)-36
銭引き ……………Ⅱ-33-7
船旗 ……………Ⅰ-4-14、6-2、7-23
船旗「とまり」旗 ……………Ⅰ-8-12
船旗(丸に十文字) ……………Ⅰ-5-16、7-9、9-6、10-4
扇子 ……………Ⅰ-5-15
扇子 シンス ……………Ⅱ-19-23、30-12
船頭 シンドウ ……………Ⅰ-12-4
船尾飾り ……………Ⅰ-8-14
造花 金花 ……………Ⅱ-31-2
崇元寺 スーギージ ……………Ⅰ-15-7
崇元寺の石門 ……………Ⅰ-15-8
崇元寺前の下馬碑 ……………Ⅰ-15-9
綜紵 ……………Ⅱ-28-3
造船所(唐船作事場) すら場、すら所 ……………Ⅰ-7-35
草履 サバ ……………Ⅱ-19-12、23-8、24-7、26-23、30-14
僧侶 ボージ ……………Ⅰ-10-16、13-6
僧侶主従 ……………Ⅰ-16-22
礎石 ……………Ⅲ-46(1)-3
粗朶(そだ) ……………Ⅲ-46(2)-7
曾津高崎〈地名〉 ……………Ⅲ-47(1)-2
外に座って涼む ……………Ⅰ-15-11
算盤 スルパン ……………Ⅱ-25-16、27-5

た

太鼓 ……………Ⅰ-5-10、Ⅱ-34-4
太鼓 チヂン ……………Ⅲ-45(2)-9
太鼓橋 ……………Ⅲ-47(2)-20
太鼓を叩く ……………Ⅰ-5-9、Ⅲ-49(2)-6
体重で葉をのす ……………Ⅱ-26-14
台瀬〈地名〉 ……………Ⅰ-16-11
高倉 ……………Ⅲ-40(1)-14、41(2)-8、46(1)-1
滝 ……………Ⅲ-42-1
竹垣 ……………Ⅲ-45(1)-1、48(1)-4
竹籠 ティル、ティール ……………Ⅲ-42-5、46(2)-17
タコを捕る タクトリ ……………Ⅱ-27-27
たすき掛け ……………Ⅱ-27-19
手綱 ……………Ⅰ-14-3
立神〈地名〉 タチガミ ……………Ⅲ-41(1)-3、50-1
立台 タティダイ ……………Ⅱ-31-9
立って舟を漕ぐ ……………Ⅰ-2-4
手綱 バナジィナ(鼻綱) ……………Ⅱ-23-3
経糸張り? ……………Ⅱ-29-7
縦帳 ……………Ⅱ-27-14
立て膝で座る ……………Ⅱ-18-7
立て膝をつく ……………Ⅱ-20-15、21-11、26-26
多棟式民家 ……………Ⅲ-48(1)-2
種豚 ……………Ⅲ-48(2)-17
煙草入れ? ……………Ⅰ-16-31
煙草入れ ……………Ⅱ-18-6、18-14、Ⅲ-46(2)-11
煙草入れ フゾー ……………Ⅱ-20-12、22-12
煙草に施肥する ……………Ⅱ-19-9
煙草の葉を束ねる ……………Ⅱ-26-13
煙草の葉を円状に並べる ……………Ⅱ-26-15
煙草盆 タブクブン ……………Ⅱ-18-15、21-16、24-3、31-6
壺 ……………Ⅱ-29-10
俵を作る ……………Ⅱ-25-4
俵を積む ……………Ⅱ-27-31
俵を運ぶ(牛) ……………Ⅱ-25-11
俵を運ぶ(馬) ……………Ⅱ-25-14
俵を運ぶ(人) ……………Ⅱ-25-6
反物 ……………Ⅱ-27-2
慶伊瀬島 慶伊干瀬(チービシ) ……………Ⅰ-4-7
馳走 ……………Ⅲ-45(2)-8
縮れ毛 ……………Ⅱ-37-1
チャーギ(イヌマキ)道 ……………Ⅰ-16-6
茶器 ……………Ⅱ-24-6
茶湯崎缸 チャナザチバシ ……………Ⅰ-15-1
中型船 馬艦船 ……………Ⅰ-4-1、4-3、4-21、4-22
中型船 大和船 ……………Ⅰ-4-2

中国人(清人)漂着民 ……………Ⅰ-16-23
中国人漂着民の収容所 ……………Ⅰ-16-20
中山門 ……………Ⅰ-17-19
提灯 ……………Ⅱ-32-9
苧績み ブーウミ ……………Ⅱ-29-3
苧剥ぎ? ……………Ⅱ-29-1
苧引き? ……………Ⅱ-29-2
苧をなう ブーズム ……………Ⅱ-18-1、26-25
丁髷 ……………Ⅰ-9-9、10-37、Ⅱ-36-2、Ⅲ-41(2)-11、49(2)-11
通堂〈地名〉 トウンドオー ……………Ⅰ-11-10
杖 グサン ……………Ⅱ-30-3
継ぎあて ドンザ ……………Ⅲ-46(2)-31
継橋 ツギハシ ……………Ⅰ-9-14
築山 ……………Ⅲ-45(1)-2
辻村〈地名〉 ……………Ⅰ-13-16
綱引き用綱(雄綱) ……………Ⅱ-32-13
綱引き用綱(雌綱) ……………Ⅱ-32-14
紡錘 ……………Ⅱ-28-14
釣竿 ……………Ⅰ-5-27、Ⅱ-27-30
釣瓶 チリ ……………Ⅱ-18-22
ツワブキ ツワシャ ……………Ⅲ-46(2)-9
手桶 ……………Ⅲ-45(2)-12、48(2)-10
手斧 ヤマガタナ ……………Ⅲ-46(2)-12
手下げ籠 ……………Ⅲ-46(2)-29
手拭い ウックイ、サージ ……………Ⅲ-42-7
手拭い被り ……………Ⅱ-22-8、23-16、24-13、25-10、35-4
手の爪(伸ばしている) ……………Ⅱ-38-12
神山〈地名〉 テラヤマ ……………Ⅲ-43-3
手をする女性 ……………Ⅱ-30-4
手を振り会釈する ……………Ⅱ-18-19
天尊小堀 テンソングムイ ……………Ⅰ-13-3
天尊廟 ……………Ⅰ-13-1
天女橋 ……………Ⅰ-17-31
天秤ばかり ……………Ⅱ-24-15、25-15
天秤棒 ……………Ⅱ-18-24、19-7
天秤棒に座る ……………Ⅱ-19-3
天幕 幕屋 ……………Ⅰ-6-17、7-16、7-34、9-10、10-5
投網する ……………Ⅰ-2-6
投網を打つ ……………Ⅱ-27-37
投網を運ぶ ……………Ⅱ-27-38
樋 ……………Ⅲ-44(1)-2
唐船小堀 トーシングムイ ……………Ⅰ-11-9
唐守嶽 トウマムイ ……………Ⅰ-13-11
戸円への道 ……………Ⅲ-43-1
斗搔 トーカチ ……………Ⅱ-25-2、27-11
斗搔升 ……………Ⅱ-25-3

徳利	Ⅱ-32-11、Ⅲ-49(2)-20
徳利 カザリクビン	Ⅱ-31-7
徳利 (カラカラ)	Ⅱ-32-5
徳利 (椰子の実製)	Ⅱ-32-4
徳利を下げる	Ⅲ-49(2)-21
土俵	Ⅲ-49(2)-22
土瓶 チュウッカー	Ⅱ-20-10、21-15、32-2
苫 カマス／カマジー	Ⅰ-14-14
泊港	Ⅰ-16-16
泊高橋	Ⅰ-16-15
泊高橋碑	Ⅰ-16-14
泊前道 泊メーミチ	Ⅰ-16-13
泊村〈地名〉	Ⅰ-16-8
艦の装飾 (人物の図)	Ⅰ-6-4
艦の装飾 (鳳凰の図)	Ⅰ-6-3
艦檣	Ⅰ-6-8
銅鑼	Ⅰ-6-7、7-25、33-8、35-5
銅鑼を打つ	Ⅰ-6-6、7-24
鳥居	Ⅰ-13-17
鶏の面	Ⅰ-10-28

な

名音〈地名〉	Ⅲ-43-4
中入り	Ⅲ-49(2)-14
長着	Ⅱ-19-18
中剃り	Ⅲ-44(2)-8
永田川	Ⅲ-40(1)-8
中の橋 (臨海橋)	Ⅰ-9-12
長浜〈地名〉	Ⅰ-12-15
中三重城	Ⅰ-9-13
名瀬湾	Ⅲ-40(2)-20
捺染	Ⅱ-29-8
七つ星旗	Ⅰ-4-12、6-9、7-22
七星山 ナナチパーカー	Ⅰ-14-33
鍋 ナビ	Ⅱ-22-4
波上宮 ナンミン	Ⅰ-13-12
苗代あるいはマコモ	Ⅲ-48(2)-16
縄をなう	Ⅱ-26-18
南蛮甕	Ⅱ-33-2
南蛮瓶	Ⅲ-49(2)-10
荷	Ⅰ-10-39
仁王像 ニオーブトゥキ	Ⅰ-13-4
仁王像 (阿吽) ニオーブトゥキ	Ⅰ-17-29
日本刀	Ⅰ-9-7、10-42、Ⅱ-36-2
荷を担ぐ	Ⅰ-11-13
荷を運ぶ	Ⅰ-10-19

沼井台 デーグァー	Ⅰ-14-13
布巻	Ⅱ-28-6
猫背気味に歩く	Ⅱ-18-20
糊入れ?	Ⅱ-29-12
糊付け?	Ⅱ-29-9

は

灰入れ	Ⅱ-18-4
灰吹 パイフキ	Ⅱ-21-13
灰焼き フェータチ	Ⅰ-12-13
羽織	Ⅱ-26-10、Ⅲ-49(2)-9
箱	Ⅰ-9-17、10-20、12-12、Ⅱ-19-19
箱 (食事?)	Ⅰ-11-15
箱 (食事と酒?)	Ⅰ-10-31
ハサミ	Ⅱ-28-8
挟み箱持ち	Ⅰ-14-30
箸 バシ	Ⅱ-20-17
橋 スラ場への道	Ⅰ-3-3
舂	Ⅲ-40(2)-19、47(2)-15
芭蕉 バシヤ	Ⅲ-45(1)-3
芭蕉衣 バシヤギン	Ⅲ-42-4、46(2)-21、48(2)-11
芭蕉衣 バシヤギン (藍染)	Ⅲ-42-10、45(2)-15
芭蕉衣 バシヤギン (草木染め?)	Ⅲ-45(2)-14
芭蕉束 バシヤタバイ	Ⅲ-42-6
芭蕉の葉	Ⅲ-46(2)-8、49(2)-16
芭蕉布? サジ	Ⅲ-49(1)-2
芭蕉山 バシヤヤマ	Ⅲ-42-2
箸緒	Ⅰ-7-5
はずみ車	Ⅱ-28-12
旗	Ⅱ-33-9、34-2
裸	Ⅱ-38-10
旗頭	Ⅰ-12-3
旗頭 (刀型)	Ⅰ-5-30
旗頭 (矛型)	Ⅰ-10-23
畑を起こす	Ⅲ-44(1)-4
旗竿	Ⅱ-34-1
裸足 カラビシヤ	Ⅱ-18-18、20-13、23-6、24-16、25-9、26-4、27-8、38-11、39-7
裸足	Ⅲ-42-3
旗止め具?	Ⅰ-7-38
旗幡	Ⅲ-49(1)-3
旗を持つ	Ⅰ-8-5
撥	Ⅰ-7-26
鉢巻	Ⅱ-19-4、26-17、27-18、35-1、38-1、Ⅲ-44(2)-10、46(2)-23
八幡缸	Ⅰ-15-6

葉で赤子をあやす	Ⅲ-48(2)-22
鼻輪	Ⅱ-23-2
馬場 ウマイー	Ⅰ-14-1
速足 アシクマス	Ⅰ-14-9
早糸	Ⅱ-28-13
はらいたけ ハボウキ	Ⅰ-14-20
番所	Ⅰ-17-4
帆船	Ⅲ-40(2)-16、42-12、47(2)-12、50-4
碑	Ⅰ-10-17
杼	Ⅱ-28-4
火入 ビートゥリ	Ⅱ-21-12
日傘	Ⅲ-49(2)-13
東仮屋	Ⅲ-40(2)-35
緋寒桜	Ⅲ-44(2)-16
魚籠	Ⅰ-2-7、Ⅱ-27-25
魚籠 (弁当入れ) イベラク	Ⅲ-46(2)-22
柄杓 フダル	Ⅱ-22-5、29-11
額負い運搬 カツケリ	Ⅲ-46(2)-19
左手で箱を持つ	Ⅱ-19-21
火縄 ビイナー	Ⅱ-22-13
日の丸旗	Ⅰ-4-13、6-15、7-14、8-2、12-2
百姓の家 (茅葺き)	Ⅰ-16-4
瓢箪型の瓶	Ⅲ-45(2)-11
ブーサーをする	Ⅰ-13-9
笛	Ⅱ-35-6
吹き流し?	Ⅰ-10-7
吹き流し	Ⅰ-10-24
豚を操る	Ⅲ-48(2)-18
文机	Ⅱ-25-18
仏殿	Ⅰ-17-23
船倉 フナグラ	Ⅲ-40(2)-24、47(2)-11
船倉道〈地名〉 フナグラミチ、フナグラビラ	Ⅲ-40(1)-1
船漕ぎ競漕 ハレコギ、ハーリー	Ⅲ-41(2)-4
船手蔵 (船手座)	Ⅰ-11-4
風呂敷包み	Ⅱ-26-9、27-6
文書の作成	Ⅱ-25-17
褌 サナイ	Ⅱ-22-2、23-7、25-8、27-33
肩上運搬する	Ⅱ-36-14
弁財天堂	Ⅰ-17-32
舳先飾り	Ⅰ-8-13
舳先の装飾	Ⅰ-4-18
舳先の装飾 (獅子の図)	Ⅰ-7-12
舳先旗	Ⅰ-4-17、5-5、6-18
へら	Ⅱ-18-10、19-13
遍照寺 (万寿寺)	Ⅰ-16-5
弁天堂	Ⅲ-40(2)-22

弁天山〈地名〉	Ⅲ-40(2)-23
弁髪	Ⅰ-16-25
帆	Ⅲ-47(2)-14
帆 網代帆	Ⅰ-5-26
帆 (頭巾頂?)	Ⅰ-4-15
帆 ブー	Ⅱ-30-10
砲煙	Ⅰ-4-19
烽火台?	Ⅰ-16-3
方形胴の魚籠 イベラク	Ⅲ-46(2)-28
帽子	Ⅱ-35-7
帽子 (笠風)	Ⅱ-39-4
帽子 (つば付き)	Ⅰ-16-24
帽子 (つばなし)	Ⅰ-16-32
帽子 (洋風)	Ⅱ-39-9
奉神門	Ⅰ-17-8
棒技 ハイヌシマ棒	Ⅱ-34-5
ほお紅	Ⅲ-45(2)-13
北殿	Ⅰ-17-6
祠 ミーヌシン	Ⅰ-3-6
帆摺れ	Ⅰ-7-10、10-2
帆摺管	Ⅰ-7-6
帆綱 ティンナー (手綱)	Ⅱ-30-11
帆柱	Ⅰ-10-1、Ⅲ-47(2)-13
微笑む	Ⅱ-36-8
微笑む (談笑中か)	Ⅱ-39-2
ホラ貝を吹く	Ⅲ-49(2)-7
彫物 ハヂチ	Ⅱ-18-26、19-14
群倉 ボレグラ	Ⅲ-47(2)-10
梵瀾漸崎〈地名〉	Ⅲ-41(1)-2、50-2
盆	Ⅱ-18-3
本仮屋	Ⅲ-40(2)-28
梵鐘	Ⅰ-13-5
盆の窪 カミタテ	Ⅲ-45(2)-20
本帆	Ⅰ-4-16、5-8
本檣	Ⅰ-6-13、7-17

ま

前島〈地名〉	Ⅰ-16-18
前結び カガンヌブー	Ⅱ-18-21
薪にする生木	Ⅲ-46(2)-14
幕	Ⅰ-10-25
幕の下から顔を覗かせる	Ⅰ-12-6
髷	Ⅱ-18-12、19-16、24-4、26-1、27-7
髷 (男) カタキキサ	Ⅱ-20-5、21-6
髷 (男) カタカシラ	Ⅲ-41(2)-14
髷 (女)	Ⅱ-20-2、21-3

髷（女） トノシビ（唐結び） ……Ⅲ-41(2)-12
髷（後頭部） トノシビ ……Ⅲ-45(2)-19
髷 トノシビ ……Ⅲ-46(2)-24、48(2)-14
髷（右上） トノシビ ……Ⅲ-45(2)-18
升 ……Ⅱ-27-12
升状の柄杓 ……Ⅱ-19-8
松 ……Ⅲ-43-11、47(2)-21、48(1)-1
松林 ……Ⅰ-2-17、16-7
松林 住吉の松林 ……Ⅰ-3-5
まねき ……Ⅱ-28-2
招き手 ……Ⅲ-45(2)-23
鞠をつく ……Ⅱ-26-5
鞠を投げ上げる ……Ⅱ-26-12
丸木柱 イジュの柱 ……Ⅲ-46(1)-2
まわし ……Ⅲ-49(2)-4
万鞆（浜曳） クルバシ ……Ⅰ-14-18
マント ……Ⅱ-37-4、38-9、39-1
三重城 ミーグシク ……Ⅰ-5-32、9-15
美栄橋 ミーバシ ……Ⅰ-14-32
潞標 みう木 ……Ⅰ-5-25、9-18、12-16
右手で箱を持つ ……Ⅱ-19-22
水売舟 ……Ⅰ-2-2
水桶 ……Ⅰ-2-3、Ⅱ-36-9
水桶？ ……Ⅰ-10-34
水桶 ミズタンゴ ……Ⅲ-49(2)-25
水甕 ミジィカミ ……Ⅱ-22-7
水に浸した糸？ ……Ⅱ-28-10
蓑 ……Ⅱ-23-9
見張り小屋 ……Ⅰ-16-21
耳紐 ……Ⅲ-48(2)-19
耳輪 ……Ⅱ-37-2、38-8
ミャク釣り ……Ⅱ-27-36
宮古蔵 ミャークグラ ……Ⅰ-11-3
弥勒 ミルク ……Ⅱ-33-4
民族衣装 ……Ⅱ-38-3
むかで旗 モカズ旗 ……Ⅰ-4-11、6-10、7-20
向鉢巻 ……Ⅰ-14-7
薙 ニカフク ……Ⅱ-25-5、26-16、36-11
薙 ……Ⅱ-27-13
無人島 大いふ（ナガンヌ） ……Ⅰ-4-4
無人島 神山 ……Ⅰ-4-6
無人島 小いふ（クエフ） ……Ⅰ-4-5
鞭 ……Ⅱ-23-10
筥 ……Ⅲ-48(2)-20
目隠し塀 ヒンブン ……Ⅲ-40(2)-31
面を被る ……Ⅰ-5-28
餅 ……Ⅱ-31-17

餅をつく ……Ⅱ-36-6
もっこ棒 ……Ⅱ-27-24
元結 ……Ⅲ-49(2)-19
物に座る ……Ⅱ-39-6
糊種 ……Ⅱ-33-6
糊はき ……Ⅱ-27-13
木綿の下着 カカン ……Ⅱ-26-6
もろ肌を脱ぐ ……Ⅱ-25-7、27-32
諸蓋 ……Ⅲ-49(2)-15
門口 ジョーグチ ……Ⅲ-47(2)-19
紋付袴 ……Ⅰ-10-36、Ⅱ-36-2
紋付羽織 ……Ⅰ-9-8

や

八重山役人 ……Ⅱ-24-5、32-12
屋形船 ……Ⅰ-12-1
屋形船 流れ船 ……Ⅰ-5-19、10-22
焼内湾 ……Ⅲ-47(1)-5
山羊島〈地名〉 ……Ⅲ-40(2)-15、41(1)-1、50-3
焼畑？ アラヂパテ ……Ⅲ-43-7
櫓 ……Ⅲ-49(1)-1
屋純〈地名〉 ……Ⅲ-47(1)-1
家主 ……Ⅲ-45(2)-7
家主の妻 ……Ⅲ-45(2)-21
屋根付き門 ヤージョー ……Ⅰ-13-2
屋根付き門 ……Ⅲ-40(2)-33
弥帆（前帆） ……Ⅰ-5-4
弥帆柱 ……Ⅰ-7-3、10-3
弥帆檣 ……Ⅰ-6-16、7-13
ヤマカシラ ……Ⅱ-33-1
山神〈地名〉 ……Ⅲ-40(1)-11
大和浜〈地名〉 ……Ⅲ-43-6
大和役人 ……Ⅱ-24-1、32-8
屋良座森城 ……Ⅰ-3-9
檜持ち ……Ⅰ-14-29
遊女 ジュリ ……Ⅰ-7-7、10-6、11-5、12-7、13-8
湯桶 ユーチギ ……Ⅱ-31-10
ユカリツチュの家？ ……Ⅲ-40(1)-12、43-5、47(2)-9
雪崎〈地名〉 ユーチヌサチ ……Ⅰ-13-14
湯のみ ……Ⅱ-18-3
横帳 ……Ⅱ-26-22
横笛 ……Ⅱ-33-10
よせ ユシ ……Ⅰ-14-19
撚りをかける ……Ⅱ-29-5

ら

蘭館山〈地名〉 ……Ⅲ-40(2)-38
力士団 ……Ⅲ-49(2)-18
琉球人女性 ……Ⅱ-36-7
琉球人僧侶と中国人が会話する ……Ⅰ-16-27
琉球人男性 ……Ⅱ-36-16
琉球船（小型の山原船？） ……Ⅰ-16-17
龍渡寺（龍洞寺） ……Ⅰ-2-16
龍樋 ……Ⅰ-17-13
霊供盆 リョーングブン ……Ⅱ-31-19
漁師 ウミンチュ ……Ⅰ-2-5
漁をする？ ……Ⅲ-47(2)-17
臨海寺 沖の寺 ……Ⅰ-10-15
櫓 ……Ⅰ-5-12、9-3、10-13、12-5
櫓 リュー ……Ⅱ-30-6

漏刻門 ……Ⅰ-17-11
蠟燭 ……Ⅱ-31-11
蠟燭立 金龍 ……Ⅱ-31-5
艀を漕ぐ ……Ⅰ-5-13、9-2、10-12

わ

若狭町村〈地名〉 ……Ⅰ-13-18
湧田の旗頭 ……Ⅰ-5-31
綿打ち用の弓？ ……Ⅱ-29-13
渡地〈地名〉 ワタンジ ……Ⅰ-11-2
渡地遊郭 ……Ⅰ-11-6
わらざん パラザン ……Ⅱ-18-16
藁束 ……Ⅱ-26-19
藁綱 ……Ⅲ-49(2)-23
碗 ……Ⅱ-31-16

執筆者一覧		
小熊 誠	非文字資料研究センター 主任研究員（研究代表者）	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 教授
川野 和昭	非文字資料研究センター 研究協力者	
	南方民俗文化研究所 所長	
田名 真之	非文字資料研究センター 研究協力者	
	沖縄国際大学総合文化学部 教授	
得能 壽美	非文字資料研究センター 研究協力者	
	法政大学沖縄文化研究所 兼任所員	
富澤 達三	非文字資料研究センター 研究協力者	
	神奈川大学 非常勤講師	
豊見山 和行	非文字資料研究センター 研究協力者	
	琉球大学法文学部 教授	
真栄平 房昭	非文字資料研究センター 研究協力者	
	神戸女学院大学文学部 教授	
本村 育恵	非文字資料研究センター 研究協力者	
	青山学院大学大学院文学研究科史学専攻 博士後期課程	
渡辺 美季	非文字資料研究センター 研究員（共同研究者）	
	神奈川大学外国語学部 准教授	
儀間 淳一	執筆協力者	
	沖縄国際大学南島文化研究所 研究支援助手	

ISBN 978-4-904124-18-5

日本近世生活絵引 奄美・沖縄編

発行日 2014 年 3 月 20 日
編 集 『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編集共同研究班
発 行 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1
TEL 045-481-5661 FAX 045-491-0659
URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>
制作・印刷 株式会社 精興社

Printed in Japan ©神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014 非売品
著作権者の文書による許諾がないかぎり、法律が認める場合を除き、本書の全部もしくは一部を複製すること、あるいは送信公開することを禁じます。

『日本近世生活絵引』 奄美・沖縄編 正誤表

頁	正	誤
14 (Ⅰ-7-解説文5行目)	1680年代頃	1660年代頃
25 (Ⅰ-12-a)	バクキヤ	バクチャ
32 (Ⅰ-16-図中)	9下部の10を削除	-
57 (「琉球交易港図屏風」図中)	⑩を図右下の缸へ移動	-
63 (Ⅱ-19-a)	a 藍笠	a 薩笠
85 (Ⅱ-31-3)	3 常緑の葉 雪松	3 常緑の葉?
158 (本文・右3行目)	バクキヤ	バクチャ
159 (2-(5)-③部分2)	b バクキヤ	b バクチャ
202 (索引)	常緑の葉 雪松	常緑の葉?

(2014年8月25日)

*以後、新たに訂正が必要となりました場合は、当センターニューズレター「非文字資料研究 33号」(2015年1月末発行予定)にてお知らせ致します。また、ニューズレターは当センターホームページ(<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>)からもご覧頂けます。